

流星の標

—eto—

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

時は20XX年――

人々は電波を中心としたテクノロジーの発展により、便利な生活を手に入っていた。

しかし、平和だった世界を3度の危機が襲う…

一つ目は、遙か宇宙からの侵略者、FM星人による地球への攻撃…

二つ目は、悪の科学者ドクターオリヒメによる、古代文明を利用した世界征服計画。

三つ目は、犯罪組織デューラ率いるミスターキングによる、赤い流星メテオGの力を利用した世界掌握計画。

地球に訪れたこの危機を救ったのは1人のヒーローだった…

地球人の少年、星河スバルと、宇宙人ウオーロックが電波変換する事で生まれるそのヒーローの名は、ロックマン。

ロックマンの活躍により、人々は平和な暮らしを取り戻していたのである…

流星のロックマン3の後のお話を書こうと思います。

世界をノイズGの危機から救い、スバル達が中学に上がったからのお話です。

始めて小説投稿なので至らない部分ばかりですが、
よろしく願います。

目次

プロローグ	1
第2話	7
第3話	17
第4話	28
第5話	38
第6話	46
第7話	54
第8話	61
第9話	69

プロローグ

——立たなきや…

——…こんな 所で…負ける訳には…

父さんと…：…：… 一緒に…

地球に…か…え…

黒く、暗く、重い、纏わり付く様に踊り舞う砂嵐の耳障りなノイズ。

その中心で奇声を上げる巨躯な異形のモノと、その足元に転がる小さく非力な男の子。

酷く不快な空間の中で、彼の未来と、そして可能性が今、白く染まる様に虚ろへ帰ろうとしている。

その染まる白を前に、色彩を取り戻そうと必死に彼の名を叫ぶが一人。

「スバル!!スバル——!!」

——メテオGのノイズが急激に増大している!! 一体何が起こっているんだ?!

「メテオGの強力なノイズで…ロケットがコントロール不能に…!!」

「ちよ、ちよつと待って!!ロケットがなかったらスバルくんはどうやって戻ってくるのよ!!」

「スバル…!!」

天才的な技術者達に流れる汗と、冴えない言動は地球の危機を煽り、周りの者は絶望に支配される。

「私、信じてる…スバルくんはメテオGを破壊して、お父さんと一緒に帰って来るって…」

「そうだ!!アイツは今までどんなピンチも乗り越えてきたんだ!!」

「メテオGだろうが、ノイズだろうが、そんなものにスバルくんは負けません!!」

「そう…そうよね!!スバルくん…無敵のロックマン様が、たかが流星の1つや2つに負けるもんですか!!」

祈るしかない。

賭けるしかない。

力を持たない傍観者でしかいられない者達の抵抗は、唯一、託すしかない。

託された者が、折れない様に、ただ声を上げ叫ぶしかない。

「星河スバル…貴方こそ、最後の希望…」

「頑張れ、スバル…!!」

「シドウちゃん…あの子を守ってあげて…!」

地球に接近する謎の巨大流星《メテオG》

人類存亡の危機に立ち上がった男の子《星河スバル》

彼は1人、揺り籠を離れて宇宙で這いつくばっている。

「ロックマン…ここで諦めるのか?俺の思いを引き継いで戦ってくれるんじゃないかったのか?」

あか…つ…き…さん…

自分をヒーローと名乗り、そして語り、その信念の下に生きて来た男《暁シドウ》

彼の果たせなかった思いが、それを背負って立ったスバルの前に現れる。

霞んだ視界の先にユラユラと佇む幻——

「立ち上がるんだ、ロックマン。地球にはお前の帰りを待っている仲間達がいる。」

軋む体。

重たい瞼。

体から心がダダ漏れて、家族や友達、学校の先生や先輩の顔が託されたモノと一緒に流れていく。

「信じるんだ…自分の力を…ホントは俺だって、まだ終わったつもりはないんだぞ?…それなのに、お前がこんな所で倒れてて、どうすんだよ…お前ならやれる——何たってお前は…俺が見込んだヒーローなんだからな!」

ネットや、テレビ電話にメール、そして身分証明など、生活には欠かせない携帯電波端末《ハンターV G》

そして、人と人との絆を視覚化した《ブラザーハンド》

電波に溢れ、更なる生活の利便性を求め進化するこの電波世界を守り抜いた、この小説の主人公《星河スバル》この度、中学生へと新たな一歩を踏み出す。

彼の微笑ましい未来を祝福するかのよう、スズメは唄い、爽やかな朝日の光が彼の部屋に差し込む。

「ふああ……」

現在、4月1日の6時42分。

新たに、中学校への緊張の為か、7時にセットした目覚ましよりも早く目の覚めた《星河スバル》

後頭部の髪がツンツンしていて、父《星河大吾》から譲り受けた《ビジライザー》というサングラスを頭に掛けて、流星のマークをしたネックレスをしている。

黒く澄んだ瞳は、落ち着きが無くそわそわしている。

この浮つく気持ちを落ち着ける術を知らないスバルは仕方無く、歯を磨き、顔を洗って学校へ持つていく物をチェックし、制服へ袖を通す。

「…よー」

制服の生地や、黒くズッシリした重量感は、不思議と気分を高揚させ、スバルの背筋を伸ばした。

支度を終え、二階の自室から一階のリビングへ。

扉開けると、食欲のそそる香りが鼻腔をくすぐる。

香りのする方を向くと、母の《星河あかね》が朝食の用意をしていた。

「おはよう、母さん」

「おはよう、スバル。ご飯の用意出来てるから食べちゃいなさい」スバルはあかねに促されて席に着き、朝食を頬張る。

すると、スバルの前に腰を掛けるあかねだが、その顔は悪戯っぽくニコニコしている。

(あ、なんかあるぞ…)と警戒するスバル。

あのニコニコ顔で近づく時は、大抵碌でもない事が待っている時だ。

「…どうしたの？ニコニコして」

(取り敢えず、音沙汰ない事で探ってみて、変な事言い出すようなら早々に家を出よう…)と思うスバル。

「いよいよスバルも中学生ね〜…」

「…そうだね…」

(何だ…？この言いしれぬ不安は…ただただ自分が中学生になつて喜んでるだけ…？ホントにそれだけか…!?)

目を細めてあかねを警戒しながら食を進める。

中学へ上がる事に対しての喜びの笑顔ならうれしいけど…と。けれども、あかねは甘くない。

「彼女紹介してね？」

「グブウツ…!!」

ド直球のあかねの言葉に驚くスバルは口に含んだ物を吹き出す。

(な、なな、何言ってるんだ母さんは…!?彼女なんていないし！僕まだ12歳だよ…!?)

地球を救ったヒーローも母の前では形無しで、頭の中はあかねへのツッコミでグルグル回る。

星河あかねは髪を後ろで束ねたポニーテールで、明るく気丈な女性だ。

スバルの良き母親ではあるのだが、突然に突拍子の無いことを言ったりする中々油断の出来ない人だった。

そして、もう1人…

『そうよおんスバルウ！中学生にもなったらねえ、何が起きてもおかしくないんだからあん！』

ス「なんでオカマのマネ…？」

ウ『オカマじゃねえよ!』

あかねの話に乗っかってきたのは《ウォーロック》
ウィザードである。

スバルと共に死闘を潜り抜いた相棒で、彼は電波生命体が住む星《FM星》から来た宇宙人である。

ライオンの様な風貌で幽霊の様に脚が無く、体中が青1色。

粗暴な面が目立つが熱い男で、現在は地球の事を周りの人間やTVなどで学んでいる。

その為、誰かのモノマネをするのが最近のマイブーム。

現在はTVタレントの女性のマネしているみたいだが、

完全にオカマ1色。

ウ『安心してちょうだあい！彼女が出来たら、すぐに私が報告するわあん！』

あ「あら！頼もしいわロック君！よろしく頼むわね！」

ス（まずい雰囲気だな…よし、もう家を出よう…！）

「い、行ってきます…！」

「え…!?スバル…!?」

あかねはスバルを呼び止めるが、スバルは構うことなく駆け足で家を出ていった。

「まだ7時30分前なのに…」

家を出て数歩、春の冷たく吹く風がスバルの頬を伝う。

（寒いな…！）

陽気な日差しでの暖かさと、チクチクと頬を刺す風の冷たさが中学生生活への不安と、そして何より期待を煽る。

風を背を押されて自然と足が早った。

第2話

ここは県立コダマ中学校。

時刻は9時過ぎ。

始業式が終わり、教室では各々が同じ小学校上がりの仲間と顔を合わせていた。

「オッスー！元気だったかスバル!？」

スバルの名を呼んだのは《牛島ゴン太》

仲間思いの男気と、それに負けないドテン！と出たお腹の存在感が特徴。

牛井が好物で朝昼晩、毎日食べるくらいの牛井中毒者。

「お久しぶりね。中学でもお願いするわ、スバル君」

そして次に声を掛けてきたのが、お金持ちのお嬢様《白金ルナ》巻き髪のツインテールが印象的な女の子。

彼女は小学校の頃に委員長をしていた為、皆から《委員長》と呼ばれ親しまれている。

責任感が強く、真面目で面倒見がいい。

しかし、心配性であるが故に強引な時が多く、良くも悪くもお節介焼き。

「どうもです、スバル君。皆同じクラスですね！」

そして最後に《最小院キザマロ》

彼は身長が低い事がコンプレックスでいて、頭脳明晰ではあるが、それも委員長こと白金ルナには劣る為、少しネガティブな性格。

ちなみに、あらゆる情報を網羅すると豪語する都合の良すぎる《マロ事典》を持っていて、情報に長ける。

彼等は白金ルナを筆頭に、よく3人で行動している。

というか、ゴン太、キザマロ共に、白金ルナの従者みたいな感じだ。

最近はスバルもその枠組みに入りかけている。

ス「良かったよ。皆またと同じクラスで勉強出来るんだね」

ゴ「おうよ！また皆で遊べるな！早速今日、学校終わったら遊び行こうぜ！」

心の通じた仲間との学園生活は、人生を華やかにするもの。

素直に喜ぶスバル達だが、その場の空気に溺れるゴン太は既に浮かれまくっている。

あまり良い成績ではないゴン太にキザマロは釘を刺す。

キ「ゴン太君？遊びもいいですけど、たまには勉強に力を入れては？ただでさえ痛い頭をしてるんですから。色んな意味で」

端的だが、一言多い忠告。

(言いすぎなんじゃ…) と思ったキザマロ含め、スバルとルナ。

これは怒り出すとおもったら…

ゴ「ん？どーゆう意味だ？ムズカシイことは分かんねえな」

(…ウソでしょ) と呆れる3人。

ゴン太の知能は予想以上に壊滅的だった。

ル「そんな事より！係を決める時には委員長に立候補するから！

あなた達、私に投票しなさいよ!？」

ルナの目は熱く燃えていた。

ス「委員長、また委員長やるんだ…」

キ「当たり前です！委員長は常に委員長でなくては！それが、委員長たる所以！もし委員長が委員長じゃあなくなったら委員長じゃありませんよ！…あれ？委員長じゃあなくなったら委員長じゃない…？あれ？」

委員長委員長言い過ぎて、自分でも何を言ってるのか分からなくなるキザマロ。

ブツブツと、こんがらがった言葉を1人整理していると、背後から殺気が。

ル「…アンタ、私の事バカにしてるの？」

白金ルナは怒り出すと物凄い殺気を放つ。

前世で2、3人殺していきそうな…スバル達は、ルナが怒り出すと手につけられないのは身に余るほど知っている。

3人は無言で咄嗟に土下座。

ル「アンタ達私にどんなイメージ持ってるのよ!!」
逆効果だった。

そこへ、助け舟を出すようにタイミングよく教室の戸を開け、教壇へ立つ。

それと同時に始業チャイムもなる。

皆一斉に自分の席へ着席すると、先生は手に持った出席簿やプリントを教卓に置き、明るく声で挨拶を始めた。

「おはよう皆、初めましてー!」

クラス一同緊張した面持ちの中で、クラスの半分程度が挨拶に応じる。

その中で、ルナだけは違った。

背筋を伸ばし、今からでも委員長に立候補せんと言わんばかりの気迫に良くも悪くも1人浮いていた。

(さすが委員長だ…)

スバルとゴン太、キザマロは常に堂々といられるルナの胆力に恐怖を感じ取った。

先生は自己紹介を済ませた後、クラス一人ひとりの顔を見ながら出席を取り、保護者向けのプリントや教科書を配り、1日目の中学校生活は幕を閉じた。

大都会のとある高セキュリティマンション――

高度な警備システムで守られた誰もが羨む高級マンションの3LDKの1室。

外界との繋がりを断つように閉め切られた窓。

そして太陽の日差しを遮る茶色のカーテン。

洗礼されたインテリアや観葉植物には埃が積もり、間接照明の蛍光色が、床に散らかる紙切れや脱ぎ捨てられた服を闇から照らす。

キッチンからは立ち上る煙と共にヤカンが悲鳴を上げている。

そしてこの部屋の主であろう人が、のそのそヤカンに近づく。

火を止め、熱々に沸騰したお湯をカップに注いでスプーンで掻き回し作り上げたココアを口を付けながらソファに腰を下ろす。

そして、リモコンを握ってテレビをつけると溜め息が零れた。

「はあ…」

『ポロロン…どうしたの？ミソラ』

《響ミソラ》

彼女はわずか12歳ながら、歌手から始まり、CM、ドラマ、バラエティなど、様々なジャンルにTV出演し、知らない人がいない程の知名度を誇る国民的アイドル、大スターだ。

富と名声に溢れ、これ以上無い幸福を手にした彼女の心は事もあるうに殺伐としていた。

1人住む、この部屋のように。

ミ「暇あ…テレビもつままないなあ…」

『じゃあこの部屋片付けたら？引越しの準備もしないと』

ミ「イヤだ。せつかくしばらく休みなんだもん。ハープが片付けてよお」

《ハープ》

弦楽器の琴の様な姿をしていて、ウォーロック同様、彼女もFM星から来た宇宙人である。

現在はミソラの生活のパートナー、ウイザードとして一緒に生活している。

ハ『甘えるんじゃないやありません』

ミ「じゃあお腹すいたあ…」

ハ『じゃあって何よ！使い方がおかしいでしょうが！』

ミ「お腹すいたアア〜！」

駄々をこねるミソラに、諦めたようにキッチンへ向かうハープ。

四角い電子レンジの様な家電製品にお皿を入れて、ちよつとした操作の後にスイッチを押すと、みるみる料理が出来上がっていく。

完成したのはナポリタンスパゲッティ。

ハープは料理の乗った皿をミソラの前へ運ぶ。

ハ『召し上がれ』

ミ「ハープうゝ…」

ハ『なあゝくに?』

ミ「アイス取って来て」

ハ『——は?』

スパゲッティを運んできた矢先にアイスを要求されて

ハープは口を開いて呆然とする。

ハ『アイスなんかどうすんのよ…』

ミ「食べるに決まってるじゃん」

ミソラは湯気の立つ熱々出来たてのスパゲッティを前に知れつと
言つてのける。

ハ『ナポリタンと一緒に食べるのかしら?』

ミ「まさかあゝ」

ハープのトンチンカンな問いかけに対して、ミソラは茶化すように
笑つて答える。

ハ『だよねえ』

ハープはミソラと顔を見合わせ、確かめ合うように一緒になつて笑
う。

そして少し間、沈黙が部屋を覆い——

ハ『それを食べてからにしなさいよ!!』

ハープは激怒した。

ミ「フードサスペンサーは美味しくないんだもん…イヤ」

頬を膨らませてぶうぶう言い、ミソラはスパゲッティの皿の淵を
フォークの先で突つついてちよつとずつ奥へ奥へと追いやる。

ハ『我が儘言わないの! 勿体ないでしょうが!』

ハープはそれを元の位置に押し戻す。

ミ「じゃあハープが食べれば?」

そしてミソラは再び奥へ追いやった。

ハ『お腹空いたんでしよう!』

ミ「美味しくなくっちゃお腹が膨れないもおくん」

ハ『アイスだつて同じでしょうが! まったくもう…! アンタつて子
は——』

ハープは止むを得ず、溜め息混じりにスパゲッティを口いっぱい頬張りながらブツブツ説教を垂れる。

口の中の物が滑舌を悪くし、ミソラの耳には届いてはいない様子だが。

ハ「…ミソラだったら…：…しようがない子ね」

母親を2年前に亡くし、父親は生きているのか死んでいるのか、父親の話は生まれて此の方耳にすら入った事はなかった。

母親と住んだ家を離れ、だだっ広いこの部屋で自分1人とウイザード1体の生活にミソラの顔に影が覆い、喉を通る食べ物の味気なさが増して、食が細くなるこの頃。

滲み出るどうしようもない孤独感に染られたミソラの心中を察する。

ハープは空気を変えようと、ミソラに明るい提案をする。

ハ『ミソラさあ、暇ならもうすぐ午後だし、スバルくんに会いに行けば？下見も兼ねて』

すると案の定、身を乗り出す様に食いついてきた。

ミ「…え？まだ学校じゃないのお？」

ハ『終わってるでしょ。初日は主に入学式だけよ』

流石ミソラのウイザードだけあって、元気になれるツボを心得ているもので、一気にミソラの表情は晴れやかになった。

ミ「行くっ!!」

ミソラはハンターV.Gを手にとって、早速スバルへ電話をかけた。

それをハープは意味深にニヤケ顔で眺めていた――

放課後、スバルにルナとゴン太、キザマロは小学校の時の様に4人一緒に下校していた。

ス「なんか、小学校とは通学路が違うから新鮮だね」

キ「それに距離も前に比べてありますね。」

馴染みのない通学路に並ぶコンビニやレストランにスーパー。脇に入ればカフェや住宅街等、スバル達4人は着実に成長している実感に溢れていた。

ゴ「おお！あつちに牛丼屋があるぞ!?毎日食って帰れるな!」

キ「勘弁して下さい。毎日牛丼なんて食べてたら皆ゴン太くんみたいに太っちゃいますよ」

ゴ「ん?」

ゴン太は頭の中でキザマロの言ったことを想像する。

(土手っ腹のスバルに華奢な身体のルナは太鼓腹。

そしてキザマロは——あ?)

どういう訳かキザマロは小さなまま。

ゴン太の頭の中では、どうしたってキザマロが大きくなるイメージが湧かなかった。

ゴ「お前は大丈夫だろ?ちっちゃんだからよ」

キ「グフウツ…!」

1番気にして止まないコンプレックスをゴン太に一突きされたキザマロは狼狽える。

マロ事典の情報を駆使して身長を伸ばす為にあらゆる努力をしてきたキザマロには辛い一撃だった。

キ「そ、それは…言ってはならない言葉ですよ…!」

ル「そんな事より」

キ「——え、そんな事?」

反撃に転じようとしたキザマロだったが啖呵を切った矢先、ルナに遮られる。

蔑ろにされた様な横槍に納得がいかず、気が付けば咄嗟に聞き返していた。

それ程までにキザマロにとって無視出来ない事柄だが、無残にもルナは意に介さず話を続けた。

ル「今日は中学初日ですわよね?」

ス「そうだけど?」

ル「健全じゃあないわね…」

何を言いたいのかと首を傾げるスバル達3人は、ルナの倒置法にまんまと乗っかる。

ゴ「どうしたんだ委員長」

ル「ゴン太。今日の出席で2人も休んでたのよ？おかしいと思わなかったわけ？」

ス「そう言えば…」

キ「確かに…」

ルナの指摘に3人共心当たりはあったが、正直どうでもよくて気にしていなかった。

しかし生真面目な性格のルナは、中学初日に2人も欠席だなんて到底許せるものではなかった。

興味の無い3人と、許せないルナとの相反する2つの考え。

通常なら3対1でスバル達の勝ちでこれ以上掘り下げられる事はないのだが、ルナは3人にとって短い導火線の付けられたデリケートすぎる核兵器。

怒りの炎でロケットが発射されれば、スバル達に回避する術はない。

3人はルナとの和平交渉ご機嫌取りに手段は選ばなかった。

話題を切り換えて、なるべく導火線を火の元から引き離す作戦にでる。

キ「い、委員長！今から皆でお昼食べに行きましょう！」

ス「そ、そうだね！新たなスタートを祝ってさ…！」

ゴ「お？牛丼か!？」

ゴ飯と言えば牛丼一筋のゴン太。

だかもちろん、提案は誰1人取り合わずに流される。

ゴ「おい、牛丼は？無視すんなよ」

ル「イイわね、皆でお食事！この件に関してゆっくり話も煮詰められるし！牛丼以外で何処か行きましょうか」

「——!!」

男達3人は予想外の展開で目を見開いた。

ゴン太に関しては牛丼という選択肢が省かれた事による驚きだが、スバルとキザマロは違い、恐怖で顔を引き攣らせていた。

何故なら、食事という目の前に広がる話題性によってこの件に関する深追いを避ける為に提案したにも関わらず、それを逆手に取られしまい、ちよとした風で導火線に火がついてしまう位置にまで火種を近づけてしまう大失態を犯したのだ。

頭を抱えて次の策を模索するスバルとキザマロ。

そこへ、絶妙なタイミングでスバルのハンターV Gに着信が。

キ「はッ——!!」

(ハンターに着信…!!)

ス「も、もしもしイイイッ!!」

藁にも縋る思いで、着信相手も確認せずにハンターV Gからディスプレイが展開されテレビ電話に出るスバル。

その余りにも必死な形相に、ディスプレイに映る電話相手は驚きを隠せずにいた。

「だ…大丈夫…かな…?」

ス「ん?…あ!」

落ち着きを取り戻して電話の相手を理解したスバルは素っ頓狂な声を上げる。

相手は響ミソラ。

スバルとは友達以上恋人未満の男女の友情を証明してみせる程の大親友。

ミソラの芸能活動の忙しさから普段なかなか会うことが出来なかった為、スバルは身体の奥の方から湧き上がる感情に表情が綻びる。

今日1番の表情だ。

ス「どうしたの!」

ミ「今から時間ある?そっちに遊び行きたいなあ〜!」

ス「え?仕ご——」「是非ッ!!」

スバルの舞い上がった声に興味を示し、ハンターV Gのディスプレイを勝手に覗いていたルナ達3人。

スバルを介してミソラとの面識があつたルナ達。

特に、ゴン太とキザマロはミソラと関わりを持つ前からずっと大ファンだった為に、嬉々としてミソラとの会話にスバルの言葉を遮る形で割り込む。

ミ「うおお！皆お揃いだったんだね」

画面一杯に湧いて映るルナ達3人に、相変わらずといった表情を見せる。

一方でスバルは久しぶりの会話を邪魔された様で戸惑った表情をしている。

ス「いや、何で委員長達が応えるのさ…」

しかしそんな事はお構い無し。

ルナはスバルには目もくれず、デイスプレイを展開する腕に装着されたハンターV Gを自分の前に引っ張って来て勝手に話を進めた。

ル「何時に来れるのかしら？」

ミ「すぐ行けるよお〜！」

ス「いや、あの〜…」

ル「じゃあコダマ公園で待ち合わせという事でいいかしら？」

ミ「了解ツ!!」

ス「え？ちよっ…あ——！」

スバルは会話に入ろうとするも、ミソラすら取り合つてはくれずデイスプレイは無情に閉じてしまった。

そして、それに誰が何を思うでもなく、ルナ達3人は張り切って待ち合わせ場所のコダマ公園に向かうのだった。

第3話

コダマ公園――

ミソラとの待ち合わせ場所では、何処で食事をするか相談していた。

ゴン太の牛井と、ルナの高級レストランに、2つ案に苦い顔をしているキザマロの3人で議論を繰り広げている。

スバルは少し距離を置いてその様子を眺めていた。

「動くな…」

ス「…え？」

スバルの背後から何か突き付けられている感覚と共に高い声が聞こえた。

そして更に、声の主は言葉を続ける。

「騒がずに私の言う事を聞かないと、お前のハートを撃ち抜くぞ？」

抵抗も見せず、固まった様にただ立ち尽くすスバル。

緊張に打ちひしがれ、大量の汗を掻いて震えているのだろう。

声の主は後ろからチラツとスバルの表情を覗く。

すると驚く程に緩い表情をしていた。

聞き方次第では口説いている様な脅迫に、恐怖など微塵も感じてはいなかった。

ス「どうやら悪役は向いてない見たいだね、ミソラちゃん」

ミ「ええ〜！何で分かったの!?」

スバルは振り返って、久しぶりに顔を見合わせた。

だが、互いに想像していた再会とはちよつと違っていた。

驚かせてやろうと迫真の演技で迫ったミソラだったが、見合わせたスバルの顔は意に反していた為、頬を膨らまず。

スバルはシンプルに笑顔で再会するものと思っていたが、何やらミソラは機嫌が悪そうな顔だ。

ス「あれ…怒ってますか…:…?」

ミ「怒ってると思う?」

問われずとも、ミソラが纏う殺気にスバルは恐る恐る頷く。
するとミソラは満面の笑みで返した。

ミ「怒ってませんでしたあく！まあちよつとだけショックだったけどねえ」

悪役が嵌らなかつた為、今度は怒った演技でスバルを驚かせて見せたのだった。

だがそんな事より、ルナが怒った時に放つ殺気を垣間見て、余りの臨場感にスバルは頭が上がらなかつた。

ス「さ、さすが大女優だね…委員長を見た気分だったよ」

この時スバルは思った。

ミソラもルナと同じ、決して怒らせてはならない人種なんだと。

予定通りミソラも合流し、問題の昼食。

その前に、ミソラは無謀にも変装をしないで来ていた為、騒ぎになりかねないとルナがハンターV.Gからリアルウェーブで洋服のデータを取り出し、オシヤレに着せ替えた。

その後、各自家に連絡を入れ、ゴン太の牛井とルナの高級レストランが候補に上がっていたが、ミソラの一言で両案共に却下され、ファミリーレストランへ行くことが決まった。

お店に入り、店員に席を案内される。

ミソラは真つ先に奥の席へ腰を下ろす。

そしてスバルを隣へ手招きして、スバルもそれに従う。

更にルナもスバルの隣へ座り、両手に花の状態になる。

必然的に取り残されたゴン太とキザマロは、スバル達の向かいに目くじらを立てながら席に着いた。

机に並べられたらメニューを各々手に取り、食べたい物を選ぶ。

ミ「うくん…どうしよつかなあ〜」

ゴ「オレ決まったぜ！」

キ「僕も決めました！」

ル「結構色々あるのね…迷うわ」

ス「僕も決めた」

男子の面々は次々とメニユーを決めるなか、女子はなかなか決まらずにいた。

男子と違い食べられる量も限られる為、お腹と相談しながらメニユーと睨めっこしていると、ゴン太が助け船をだした。

ゴ「ミソラちゃん！残った分はオレが食べてやるぜ？」

ミ「ホント!？」

ゴン太にとってミソラは憧れの存在。

男らしさをアピールするには絶好のチャンスだ。

だが、このアピールポイントに気が付いたのはゴン太だけではない。

キザマロもまたミソラは憧れ。

負けじとゴン太に被せてきた。

キ「ミソラちゃん！僕も全然手伝いますよ！いや、手伝わせて下さい！」

ゴン太とキザマロは睨み合う。

互いの対になる視線は線香花火の様に散り、男の醜い争いが始まるうとしている。

そして、2人が散らす線香花火が、短い導火線に飛び火した。

導火線の燃える音が、徐々に消えて行くと同時に2人の血色が引いていく。

導火線の先には線香花火とは比較にすらならない打ち上げ花火が用意されていたのだ。

ル「わたしは…?」

ゴ・キ「も、もちろん手伝わせて頂きますウウツ!!」

2人は額に大量の汗を流し、机を舐めるように顔を擦り付けて頭を下げた。

ル「だったら迷うことはないわ。ね？スバルくん」

ス「え？何で僕？」

唐突に呼ばれて素っ頓狂な声を発するスバルの肩に手を置き、ルナは一言。

ル「連帯責任よ」

意味も分からぬまま責任を問われ、しかもルナの放つオーラに息苦しくて言葉が詰まるスバル。

みるみる顔から血の気が引いていく。

ミ「いいのかなあ…？」

ル「彼らに遠慮なんか要らないわ。」

戸惑いを見せるミソラに対し、ルナは情け容赦なく店員を呼んで注文を促す。

ル「アナタ達、先頼みなさい。私達時間かかるから」

嫌な予感しかしない男子達は、ルナの威圧に負けて否応なく料理を注文する。

ゴン太はハンバーグとライス大盛りのセットに、ソーセージグリル。

キザマロはミートスパゲティ。

スバルはホツケの塩焼き和膳。

そして、いよいよ女性陣の番が。

ミ「じゃあ〜私カルボナーラ！あと黒酢の酢豚和膳とシーザーサラダに、若鶏のグリルチキンとガーリックトーストで！」

スラスラと並ぶ料理名に男子達は呆然。

戸惑っては見せたものの、好奇心には負けるミソラは遠慮がなかった。

キザマロはブツブツと料理名を反復し、ゴン太は頬を引き攣らせて窓の外に広がる平和を眺めて現実逃避。

そしてスバルは両手のひらを合わせ、天を仰ぎ見て念仏をひたすら唱える。

男3人が思う事はたった1つ。

(許して下さい委員長…！どうか！どうか情け容赦を…!!)

ル「私わね…リブステークに生ハムのサラダ、ピザとオニオンスープにペペロンチーノ」

(うんうん。OKイOKイ：もうストップ。もうストップだッ!!)

ル「それから山盛りポテトにビーフシチューオムライス」

(終わりだ！終わりだよ！もう終わってくれよ：!!)

ル「あーあとミートドリアと目玉焼きハンバーグにほうれん草のグラタンをお願いしますわ」

「ちよつとオオオツ!!」

怒り出したルナに慈悲など皆無。

ミソラの倍の数もの料理を澄ました顔をして注文して見せるルナに店員も空いた口が塞がらない。

キ「そんなに食べられるんですか!？」

ル「それは自分に問うた方が早いんじゃないやなくて?」

問うまでもない。

これだけの料理、例え育ち盛りの男3人であろうとこれだけの量を食べ切れる訳がない。

男3人は静かに頷く。

(うん、残そう：!!)

だが鋭い五感の持ち主ルナは、スバル達の考えをすぐに察知し、一言釘を刺した。

ル「残したら承知しないわ：!!」

(読心術を心得てらっしやるウウツ：!!)

スバル達の地獄が幕を開けた。

次々に運ばれて来る料理に備え、各自ドリンクを用意しに男達は席を立つ。

最低限1人コップ3つは持ち、なるべく量を確保すべく氷は入れずにドリンクを汲む。

手の大きなゴン太は加えてルナ、ミソラのドリンクも確保して席に戻る。

途中店員とすれ違い、同時に見えたのは丁度すれ違った店員が運んだであろう料理が並べられたテーブル。

そして、ルナとミソラは届いた料理に次々と手をつけいく。

その様子を見ながらスバル達はドリンクを置き席に着く

と、さつきまで不規則に並べられていた料理が、男達3人の前に綺麗に配列されていた。

しかも、どの料理も殆ど2口3口分程度しか減っていない物ばかりだ。

戸惑う3人にルナは鋭い眼光で威圧し、食を煽る。

仕方なく目の前の料理を口に運んでいくが、その間にも雪崩の様に次々と並べられる料理。

それをルナとミソラは、気に入った物はそれなりに食べるものの、それ以外は味見程度にしか食べない為、目の前の料理が一向に減る気配を見せない。

ゴ「うぷツ：気持ち悪いぜ：」

キ「ゴ、ゴン太くんが：頼り：なんですから：弱音：吐かないでください：げぷツ！」

ス「は、吐かないですよツ：!?ヒクツ！——やば：」

もう既に限界に近い3人の必死な形相にミソラはニコニコしながら人事の様に眺めている。

ス「何で笑ってるの：?？」

ミ「なんか平和だなあゝって！」

ス「平わ——げふツ!?!」

耳を疑う台詞に言葉が喉で詰まり、代わりに腹の中の物が出そうになる。

そこへ追い打ちを掛ける様に追加の料理が運ばれて来た。

ル「さあ早くお皿を空けなさい。店員さんが置く場所なくて困ってるでしょう?？」

ゴ「委員長も手伝ってくれよ：」

ル「やかましい」

ゴン太の切実な願いも虚しく、ルナはあくまでも自分の食べたい物を自分のペースで食べ進める。

男3人は仕方なく無理やり腹に料理を突っ込み、なんとかしてお皿を空け、そしてまた料理が運ばれお皿を空けるを繰り返す。

一通り注文した料理が到着し、2時間後。

重たい顎を動かし、味のない異物をドリンクで喉の奥に流し込み続け、とうとう完食を迎えることが出来た。

「やっ——たアアアアッ!!う、ウツプ……!」

男3人勢いよく立ち上がり歓喜に震える。

そして吐き気にも震える。

そんな3人をミソラも拍手で賞賛するが、今にも吐きそうな3人を見て物理的にかなり距離を取っている。

ルナは微笑み何度も頷いて、とても共感している様に見える。

だが、直後に店員が現れ水を指すようにルナはメニューを覗いて注文を始める。

キザマロは慌ててルナを呼び止める。

キ「ちよつと!何してるんですか!?!」

ル「ん?デザートよ」

当然だと言わんばかりの表情で、首をひねる。

キ「何でデザート頼んでるんですか!?!」

ル「食べたいから」

キ「あ——そりや…:そうですね…:」

人が料理を注文する理由はたった一つ。

聞きたい事はそんな事ではないが、ルナの一言に納得をせざるを得ないキザマロ。

ルナは間を置いて注文に戻る。

二品、三品と数が増すにつれ、さつきまでの地獄が脳裏に過ぎる。

キ「ちよつと待って下さい!…:1人で食べるんですか…:?!」

ル「まさか」

キ「ですよね…:」

即答された事に涙するしかないキザマロ。

スバルとゴン太も第一次大戦の矢先に、料理を食べ終わった意気消沈で白目を向いている。

しばらく俯いていると、やっとルナの注文が終わりを迎える。

だが、店員が去っていく雰囲気は全くない。

頭に？マークが浮かぶよりも早く、スバルの隣から、日本中が聞き惚れた可愛い黄色い声が響く。

その黄色い声が鼓膜を震わす度、世の人達は元気を貰ったものだが、3人は逆に元気を失う。

犯人は当然ミソラだ。

ルナ以上に、スラスラと教科書を朗読する様にデザートを注文していく。

キ「ど、どうか…！お許しください…ミソラちゃん…！お願いします…！！」

震えた声で許しを乞うギザマロに、ミソラは思い掛けない発言をする。

ミ「あ、これ全部私が食べるから大丈夫！」

「……………え？」

満面の笑みを見せるミソラに、被害者3人組だけでなくルナと店員も間拔けた声をだす。

ミソラいわく、デザートは別腹、片道切符でブラックホール行きらしい。

いくらでも食べられるミソラは、デザートを手伝って第二次大戦でスバル達の英雄として祭り上げられたとか…

地獄の昼食を終えて。

太陽が地平線に被り、空に星達が顔を覗かせる夕方。

月に見守られながら帰路につくスバル達。

話題はミソラの入学先ついて、重大発表がされていた。

ミ「実は私、近々みんなの学校に通う事になったから、ヨロシクね！」

「え!?!」

男達は驚き、そして舞い上がる。

特に、ゴン太とキザマロは憧れのアイドルとの学園生活に妄想が膨らんで止めどなく、緩みきった表情を見せる2人には目も当てられない。

そんな男達とは対照的に、ルナは冷静に1つの疑問を投げかける。

ル「どういう事なの？何でミソラちゃんがうちの中学校に？」

ミソラは、ここ《コダマタウン》からかなりの距離がある《ベイサイドシティ》という場所に住んでいて、小学校も当然ミソラだけ違う。

ルナの疑問は最もだった。

ミ「えーつとお…こつちにはスバルくんがいるからあ——」

ミソラから躊躇なく出た一言「スバルくんがいるから」

この言葉が皆の（特にルナの）逆鱗に触れる。

ル「ス・バ・ル・く・ん…がアツ!？」

慌ててミソラは補足を入れる。

ミ「あ、もちろん皆もね！あつちには仕事が忙しくて友達とかいなかったしさ…へへへ」

ミソラはへらつと笑ってみせるが、どこか寂しそうな表情が伺えたスバル達。

一瞬気まざるくなる空気に、空かさずキザマロは明るく話題を切り替える。

キ「僕は感激です！憧れのアイドルと同じ学舎に通えるなんて！」

キザマロは、低い頭を更に低くしてミソラに手を合わせて拝みはじめ。

ミ「キザマロくんだったらあ…恥ずかしいから止めてよお…」

キ「いえいえ！誰が女神様を前に顔を上げられましょうか！」

キザマロのその腰の低過ぎる姿勢にスバル達は笑い合う。

そして、それを上空から微笑ましく眺める3人がいた。

ウ『ケツ！平和ボケしてやがるなスバルの奴』

『ポロロン…いい事じゃないの』

ウオーロックと、その隣にいるのは《ハープ》と言うミソラのウイザード。

弦楽器の琴の様な姿をしていて、ウオーロック同様、彼女もFM星から来た宇宙人である。

そして、

『ブロロロ！平和ボケは許さん！何故ならオレがヒマになるからだ！ブロロロ！いぎ、オレを楽しませろっ！』

彼は『オックス』

同じく、彼もFM星から来た宇宙人。

現在はゴン太のウイザードで、台詞の通り血の気が多くて猪突猛进。

姿も頭の中も牛の様な男。

ウ『お？やるかオックス！オレも退屈してたところだぜ！』

オ『お？やるかウオーロック！オレ達だけでも危機感を持って行動しなくてはな！』

主張が一致した2人。

ウオーロックは、人間の真似をして無い裾をまくり、オックスは牛の様に前屈みになり、前足で何度も地面をかく。

『いぎ！』

ゴツン!!

周囲に響く鈍い音。

互いの掛け声で勢い良く駆け出した。

そして、待っていたのは相手の拳や角ではなく…

ハ『ウツさいわね！近所迷惑でしょがバカ2人ッ！』

ハープのゲンコツだった。

ウ『アアアアアアアアアアッ!!』

ウオーロックは痛みの余り奇声をあげ、オックスはダウン。その場で倒れ込んだ。

ウ『テメエ！何すんだコノヤロウ！』

ハ『アン？』

ウ『…な、何でもないです…』

星は違えど、男と女の力関係は変わらないようだ…

ウ（やつぱりオレ、コイツ苦手だ…！これからコイツと毎日顔を合わすのか…！）

頭を抱えて、明日以降の学校生活に絶望を感じているウォーロツク。

しかしハープは、更に下の地獄へとウォーロツクを叩き落とす一言を発する。

ハ『あ！そういうえば、しばらくお世話になるからヨロシク頼むわね』

ウ『…ン？』

何の事かさっぱりウォーロツク。

当然、冴えない表情で目をパチパチさせている。

それを見て、ハープはニコツと微笑みかけて一言。

ハ『ミソラの転校に合わせてスバルくんのお宅に住まわせて貰うから』

ウ『…っ——！！??』

その時、ウォーロツクはムンクの叫びの様な形相をしていたと言
う…

第4話

星河家――

ミ「お世話になります！」

あ「自分のお家と思って遠慮はしなくていいからね！」

ミ「はい！」

あ「ああくん、もう！敬語もいらないわよ？」

どういう訳だろう。

あかねとミソラが何やら、自らの頭のキャパシティでは処理出来ない会話を繰り返している。

学校が終わり、家に着いて、学校生活への緊張感を拭う至福の場所で、今日1番の緊張感がスバルを襲う。

ス「…あの…え？何の話？」

ウ『スバル、深呼吸しろ…』

ウオーロツクは スバルの肩に手を置き、仏の様な悟った顔で深く深く何度も頷いた。

ウオーロツクのこんな顔など見た事がない。

言い知れぬ雰囲気ウオーロツクから感じ取るスバル。

ス「そ、それで…？」

スバルは意を決して問う。

(フツ、フフ！大丈夫大丈夫…何を言われても受け入れる覚悟は出来たさ。だって、ウオーロツクのこんな顔、見た事ないものさ…)

だが、あかねの一言でその甘い覚悟は足元から瓦解する。

あ「我が家の新しい家族よ！」

ミ「ヨロシクお願いします…！」

ス「――」

後にハープは語る。

その時のスバルは、ウオーロツクと同じ表情をしていたと…

ス「どゆこと…？」

あ「そゆこと」

ス「は？」

正当な理由を求めるスバルに対し、無情にも受け流すあかね。

ミ「じゃあ私、そろそろ帰ります。荷物も纏めるないといけないですし」

あ「そ？じゃあまた、楽しみに待ってるからね！送ってあげなスバル」

ミソラを送る事はいいとして、どうしてこう誰も取り合ってくれないのか。

訳も分からずにこき使われ腑に落ちないスバルだが、取り敢えずミソラを送るため玄関のドアを開ける。

ス「じゃあ行こうか、ミソラちゃん。あ、ご飯は要らないから。お腹一杯だし…」

昼間の件を思い出して再び吐き気襲われるスバルに、ミソラはクスクス笑う。

そのまま2人は笑顔で見送るあかねを背に家を後にする。

闇夜に飾られた星々の照らす道を歩くスバルとミソラ。

4月の冷たい風に頬を赤くし身を縮める2人の表情は寒さに負けない明るい顔をしている。

ミ「突然ゴメンね。スバルさんに相談もせず…」

ス「さっきの話？いいよ別に。まあ、色々問題はあるとは思うけど…」

それもその筈。

中学生の男女が一つ屋根の下で暮らすというのは余りにも非常識だ。

しかも相手は国民的スーパーアイドルという大き過ぎるブランドの魅力と誘惑に、間違いでは済まない間違いを犯してしまう可能性が大いにある。

お互いに人生を180度変えてしまう分岐点に立つことになる。

ミ「私はスバルくんを信じてるから大丈夫！」

ス「は、はい…頑張ります」

事の重大さを理解しているのか否か、軽すぎるやり取りに第三者か

らしたら不安を覚えざるを得ないが、真面目で硬派なスバルと、それを信じるミソラとの絆の強さが故なのか。

ス「ところでさ、どうせ転校してくるなら今日の入学式に合わせて来れば良かったのに、何かあったの？」

ミ「いやあく実はさ、もう入学手続きは済んでね、私も立派なコダマ中学校の生徒として今日から学校に通う予定だったんだけど：今日の始業式に出ちゃうと騒ぎになるからってハープに止められたんだあゝ：」

確かに、アイドルが入学式に混ざっていたら騒ぎになりかねない。校長先生のたじろぐ姿が用意に浮かぶスバル。

ハープの判断は間違っではないが、頬を膨らませて不貞腐れた様子を見せるミソラを気の毒に思うスバルは苦笑いするしかなかった。

ス「：あれ？」

話題に触発され、朝の事を思い出していると、ふと自分のクラスに欠席がいた事を思い出す。

ス「：あ！もしかして、欠席した2人の内の1人ってミソラちゃん？」

ミ「そうだよお！ルナちゃん達も同じクラス？」

ス「うん。びっくりする程みんな一緒だよ」

嬉しくはあるが、あまりに出来すぎた偶然にスバルは少し戸惑う。

ミ「へえ、良かったね！もしかして、ルナちゃんが賄賂でも渡してたりして：！」

コダマ中学校の1年生は3クラスあるが、仲のいいメンバーが見事に集まる偶然に、ミソラは冗談を交えて喜ぶ。

だが、スバルにはとても笑って聞き流せる冗談にはなかった。

何故なら、ルナの行動力の恐ろしさには心当たりがあるからだ。

ス「：……なんか、冗談に聞こえないんですけど：」

悲しいかな、校長先生に札束でパンパンの封筒を投げ付けて、手なずけているルナの姿が脳裏に浮かぶ。

スバルは笑えない程、想像に難くない事に顔を引き攣っていると、ある疑問が頭を過ぎった。

ス「…あれ？ちよつと待つて…なんでミソラちゃん、ボクと同じク
ラスだつて断言出来るの？」

ミ「え…？…そのお…ね！」

笑つて誤魔化したミソラ。

それでもスバルは、拭えぬ疑問を見つめる様にミソラから視線を逸
らさない。

ミソラはスバルの視線に耐えられず、モジモジと答える。

ミ「校長先生にサイン書いてあげたらさあ…」

ス「賄賂じゃん!!」

スバルは突つ込まずにはいられなかった。

ミソラは開き直つて続ける。

ミ「いやあく簡単でよかつたよ！サインでダメだったら、紐を緩め
る最終手段に出るとこだったよ…！」

ス「…ん？え？紐!？」

紐に過剰な反応を見せるスバル。

まさかとは思いつつ…そこまで思い切つたことはしないだろうと
は思いつつ…そんな慎みに欠けることはしないと信じつつも…それ
でも、紐を緩めるといふ意味を聞いただすにはいられないスバル。

それ顔は鬼気迫るものがあつた。

ス「紐つて何!?!どつちのですかッ!？」

荒くなる吐息に、額の尋常ならない汗。

スバルを慌てように、ミソラは首を傾げながら答える。

ミ「え？サイフの紐しかないよね…？」

ミソラは他に意味あるつけ？といった表情でスバルの顔をのぞき
込む。

ス「あ…だよね…ははは…」

その無垢な瞳に、スバルは自分1人、考え及んでしまったその疑問
に恥ずかしくなり、間拔けた声で必死に取り繕つた。

そして次第に、この先の生活に不安を覚えるのだった。

ス（やっぱり、1つ屋根の下に自身をなくしてきたよ…）
そうこうしている内に駅へと到着する。

そして右の視界から強い光が射し込むと同時に鉄の擦れた音が近付いてきた。

ミ「早いなあくもう電車が来ちゃった…もうちよつと話したかったのになあ」

電車は所定の位置で停車すると、幾つものドアが一斉に開き、次々と人を掃き出し、飲み込んでいく。

あつという間だった、今日という1日に別れを惜しむミソラに、スバルは前向きな言葉を贈る。

ス「…またすぐに好きにだけ話せる日がくるよ」

ミ「うん！じゃあまたねえ〜！」

ミソラは満面の笑みでスバルに手を振り、電車へ乗り込む。

そして電車はドアを閉めて出発する。

スバルはミソラを乗せた電車が見えなくなるまで見送った。

——— 全員、お集まり頂けましたかな？」

大きなテーブルを中心に四方八方、壁一面に数字の羅列やグラフ、地形など膨大な情報量を映しだすディスプレイが備えられた指令室。

ここは宇宙科学を研究する国際機関《WAXA》と、電波犯罪を取り締まる組織《サテラポリス》の拠点である《WAXA日本支部》

WAXA長官やスバルの父、星河大吾など各部署の代表達がテーブルを囲い、その中心人物であろう威厳をもった50過ぎの人物が、一人ひとりの顔を確認するように見渡す。

そこへ、招集に対して遅れて現れた人物が1人。

「君には社会人としての自覚がないのかな？ 暁シドウ君…」

若干20でサテラポリスのエースとして活躍し、星河スバルを筆頭に《電波変換》という、ウォーロックなどの特定の電波体との融合による電波化で、人外の力を得た者を集めた遊撃隊を指揮し、功績を残している《暁シドウ》

「統率力と陽気な性格で、皆からの信頼も厚いが、普段は肩の力を抜いて適当に行動している暁。」

シ「あ——…どちら様で？見ない顔ですけど…」

「初めまして、暁くん。全員揃ったようなので、自己紹介させて頂こう」

咳払いで間を置くと、その男は飄々とした態度で言葉を繋げる。

「アメリカやヨーロッパ諸国など、現場でテロを取り締まってきた、オリオンと言う。コードネームだ。本日よりサテラポリス長官として指揮を執る事となった。WAXA長官には快い協力をお願いしたい」

シ「そんな話、聞いていませんが？」

突然現れたオリオンとぶざけたコードネームを名乗る自分の上司にあたる存在に、暁は目くじらを立てて食いつく。

長官はそれを諫める様に、オリオンの立場に立って口を開く。

長官「すまない。急遽、話が決まって連絡する暇もなかった。だが、電波犯罪におけるスペシャリストだ。その手腕は本物だから安心してたまえ」

納得がいかないと眉間にシワを寄せ、拗ねた態度を見せるが、お世話になっている局長の手前、渋々口を噤む。

オリオンは、そんな暁の態度を鼻で笑い話を続ける。

オ「では、早速仕事の話で申し訳ないのだが…私は今、とてもとても大きな懸念を抱いてきる…」

指令室をピリピリとした緊張感が包む。

彼の懸念は当然、テロ犯罪に対するものだという事を経歴が語っていた。

メテオGによる地球の危機からまだ数ヶ月。

新たな事件の予感に、面々が頭を重たそうに抱える。

沈黙が支配する中で、暁は眉を顰めて問うた。

シ「懸念って…なんですか？」

オリオンの次の言葉に暁達は驚愕の余りに席を立つ。

必死に言葉の意味を模索するが、その答えが見つかる事はなく呆然と立ち尽くす。

オ———星河スバルの件だ：」

だ「な、何故：：息子が懸念なんて：：！」

シ「自分が何言ってるか分かって言ってます：：？彼は3回も地球上を救った、1番の功労者だ」

1度目は今から5年前のスバルが小学2年生の時、WAXAが地球外生命体を見つけ、スバルの父《星河大吾》が地球外生命体との交流を図って宇宙ステーション《絆》を打ち上げる。

そして友好の証、ブラザーバンドを結ぼうとするが、それを敵意と誤認してウォーロック率いるFM星人から襲撃に遭う。

後に負い目を感じたウォーロックは3年後、FM星を裏切り大吾の息子、スバルの下へ現れる。

そしてFM星は裏切り者の始末の為に地球への攻撃を始めるが、スバルとウォーロックの抵抗に戦いは肥大化し、地球を危険視したFM星は地球を破壊する為に戦争を仕掛ける。

スバルは人知れず戦い続け、遂にFM星の王《ケフェウス》と和解するに至った。

2度目は、FM星との戦いから2ヶ月後、地球の支配を企む科学者《オリヒメ》が、遙か昔に栄えた古代文明の遺産《オーパーツ》の秘めた強大な力を利用し、《ムー大陸》を復活させようとした。

それを阻止する為の戦いを繰り広げ、地球をオリヒメの野望を打ち砕いた。

これを機に、ロックマンの存在が世界で認知されるようになる。

そして3度目は、表向きはキング財団の天才科学者キング博士として、多額の寄付で社会に貢献し、多くの孤児を育てていた男《Mr.キング》だが、裏では犯罪組織《ディーラー》を率い、メテオGの力を利用して地球の支配をもくろんでいた。

暁シドウはスバル達の集まる遊撃隊を指揮し、ディーラーと全面対決。

追い詰められたディーラーはヤケを起こし、メテオGを地球に衝突させようとするが、スバルは世界中の人達の応援を背に受け1人メテオGへ突入し、これを阻止した。

オ「彼は偉大な功績を残した。国家の枠を越え、世界中の人間が称賛した。3度の危機を乗り越えたその力…奇跡や偶然で片付けるには余りにお粗末だ」

スバルを疑いながら、それでも称賛してみせるオリオン。

これから国を挙げて星河スバルを表彰すべきとでも言い出しそうな雰囲気だ。

勿体付けた言い方に、苛立ちを隠せないでいる暁に代わり、WAX A長官は彼の言葉の意味を探る。

長官「つまり？貴方の言い方ではスバル君を褒めているように聞こえますが？彼の力は本物だと…」

オ「そうだとも。だからこそ、彼の存在は隠しとくべきだった…」

シ「は…？」

皆が戸惑いを見せる中で、オリオンはここで更に、話の本題である大きな問題を突き付ける。

オ「つまり…彼の気分で振るうには余りに過ぎた代物だと言うことだよ。中学1年生の純粋で、これからどう成長するかも分からない子供が、世界を掌握し得る力を持つなど危険過ぎるとは思わないのか？誰が星河スバルの将来の人格を保証する？組織という組織は彼に目を付け、狙っている。綺麗な水が、邪な輩に濁されてからでは遅いと考えないかね？」

スバルの力を裏付ける根拠として、その活躍と実績は充分すぎる。

そして、その力が幼い少年の手に収まる程のものならば、利用価値が多岐に渡るだろう。

様々な思惑を持った人間が、その力の根源に注目するのは必然だ。

だ「なら俺達大人が、濾過してやればいいじゃないですか！息子の為ならなんだってする！」

だが、スバルの人柄を良く知っている暁達からしたら、不快以外の何物でもない。

当然、スバルを擁護する立場を示すが、オリオンに直ぐさま切り返される。

オ「出来るのか？君1人でか？相手は巨万スバルといるんだぞ？水がド

ス黒く汚れきつてからでは遅いと言ったろう？人格形成とは十色の泥欲に塗れて出来上がるものだ。清くいられるモノなど無い。ならば濾過等と後手に回らずとも、事前に我々が色を付けなければいい」

中学生となれば、以前にも増して視野が広がり、様々な世界を垣間見る事にもなる。

お金持ちの親を持つ者。

友達が沢山いるクラスのムードメーカー。

頭脳明晰で進路が保証されている者。

皆が羨む彼女を連れている者。

スポーツ秀でている者。

周囲と自分を重ねては、嫉妬にイライラしたり、俯いたり、それは自己を確立する土台を建てる期間で、不安定な精神状態が続く。

金をぶら下げ、女を抱えて近づき、イライラと傾いた感情を助長する者。

俯き凹んで生まれた隙間を埋める者。

そんな輩が近付けば、欲を優先する歳頃の彼等に正論は煙たくもなる。

スバルがどう転ぶのか不確定要素に尽きない事に懸念を覚えるのは当然の事だ。

それは暁達も同様で、彼の真っ直ぐな成長を保証出来るの者は誰もいない。

反論しようにも反論材料が無く、指令室の時間が止まるなか、大吾はゆつくりと口を開く。

だ「それで貴方は…息子をどうしたいんです…？人目に触れないように水スバルを隠しますか？それとも…火にでも掛けるつもりで……？」

悔しそうに眉間を寄せる大吾。

オリオンは彼の言葉に微笑を浮かべる。

オ「隠してはいずれ、水が腐る…火に掛けるのは最後の手段……今は彼を監視下に置く。方法については既に準備を進めている」

(そして最終的には…その水を真っ赤に染めるつもりだ…星河大吾よ)

オリオンは頭で描く思惑に、意地悪な笑みがこぼれる。

オ「実は日本へ戻る前に、民間から技術者を募っていたのだが…なかなか優秀な人材が揃ってきたのでね。そろそろ事に移ろうと思う」
シ「なぜ民間の技術者を…？技術に富んだWAXAを使えばいいじゃないですか」

オ「それはまた、後程…君にも快い協力をお願いするよ？…暁君」
オリオンは用が済んだと言わんばかりにスタスタ指令室から立ち去り、暁はその後ろ姿を、齒軋りを立て睨みつける。

WAXA長官は陽気な暁の荒れように、オリオンの懸念を嫌でも理解せざるを得ないのだった。

長官「やれやれ…どうやら、彼と暁君は恐ろしく馬が合わないようだ…これはしばらく荒れるな…」

第5話

コダマ中学校――

学校生活2日目。

スバルが眠気眼で教室の扉を潜ると、怒声にも近い声でゴン太とキザマロが駆けてくる。

その表情は酷く慌てた様子だ。

ス「：どうしたの？朝から：」

スバルの緩い表情が、急く2人の感情を掻き立てる。

キ「どうしたじゃないですよ！そんなマヌケな顔して全くもう！」

ゴ「アイツが来てんだよ、アイツがさ！」

ス「：マヌケは余計じゃない？」

朝から頭の痛そうな顔で強張るスバルの手を、問答無用で引っ張るゴン太とキザマロ。

だがその先で待ち受けた光景に、2人が慌てた理由を理解した。

「オッス！久しぶりじゃねえか：星河スバル」

ス「ジ……ジ……ジャック!!」

《ジャック》と呼ばれた男は、黙ってスバルの前に手を差し伸ばす。

スバルもそれに応え、ジャックの手を握る。

しばらく互いの顔を見つめた後、久しぶりの再会に言葉もなく互いの体を寄せ抱き合う2人。

ス「ジャック……!!」

ジ「スバル……!!」

ゴ、キ（：エツ!?)

唐突に起こった2人の抱擁は、ゴン太とキザマロに色んな意味でその絆の強さを見せ付ける。

特に、スバルのはしやぎ様は尋常じゃない。

ス「なんでここに!？」

ジ「オレもこの学校に通う事になったんだよ……その、アレだ……前みたいに仲良くして……くれるか……?」

ス「もちろんだよ！仲良くするさ！こんなに嬉しい事はないよ！」

抱擁しながら続く会話に、周囲から奇怪な視線が集中する。だが2人は完全に自分達の世界に入っている。

そこへ、割って入る不粋な輩が1人。

ル「アンタ達、いい加減離れたらどうなの？……ホモセクシユアル……？」

ハツと2人は距離を取る。

その顔はお互い紅潮している。

ジャックは恥ずかしさを紛らわす為にルナに茶々を入れる。

ジ「うるせえよ……このドリル女！ホモセクシユアルなのが悪いのか！？／＼／」

ル「誰がドリル女よ！これはカールよカール!!」

売り言葉に買い言葉。

唯一ルナに、抵抗という無駄な努力を怠らないジャック対、圧倒的な覇気を纏ったルナの口喧嘩が始まろうとする。

だが、スバルがジャックの前に立ちはだかり、一言を告げる。

ス「ジャック……悪いけどボクは、女の子が好きなんだ……」

ル・ゴ・キ「……は？」

スバルの言葉でクラス中が沈黙する。

この沈黙には、ジャックに対する言葉にならない憐れみや同情が込められているのを感じると、ジャックはそれを払拭する様に声を荒らげる。

ジ「つたりめえだろうがッ！何かオレ振られた見たいじゃんかよ！？」

告つてもねえのによ、おい!!／＼／

ス「そっか……よかった……君を傷つけなくて済んで……!」

スバルはホツと胸を撫で下ろす。

ジ「ホツとすなッ！オレだって女が好きだから!!ただホモセクシユアルに対する理解もありますっただけだから!!」

スバルの誤解から始まったコントの様な顛末に、ジャックの必死なツツコミ^{弁解}っぷりも相俟って、クラス中でバカにした笑いが起こる。

ジ「笑うなアアアアッ!!」

ジャックの最後のツツコミが学校のチャイムに被さる。

合わせて教室に入ってくる先生も、クラスの笑いを煽る様に言葉を投げかける。

「諦めなさいジャック。星河スバルは貴方と付き合う気はないですよ」

ジ「やかましいわッ!!しつこいんだよテメエ!!」

ツツコミと同時にジャックは先生に視線を向ける。

クラスの皆も同様、動きに習うように視線を先生へ向けると、一斉に笑いが静まりだす。

そこには昨日いた男性の先生ではなく、若い女性の先生が立っていた。

それも、恐ろしい迄に放たれる殺気にみんなの顔が一斉に青ざめる。

「ジャック…誰に向かってそんな口をきいているのかしら…?」

ジ「ね、ねね…姉ちゃん!!」

「姉ちゃん!?!」

ジャックは弁明や謝罪よりもまず、言葉もなく真つ先に頭を擦り付け、床を舐める勢いで土下座した。

ルナに逆らおうとする程の度胸を持つあのジャックが、一方的に負けを認めるは、姉《クインティア》18歳。

彼女は常に無表情で、感情を表に出す事が少ない。

弟のジャックは熱くなりやすく、粗暴な面がある。

そして、姉にしか心を開く事はなかったが、スバル達と関わりを持った事で、周囲を受け入れ始めている。

ジャックが人と関わり、どう成長して行くか、楽しみなクインティアだ。

ク「早く席に着きなさい」

ジ「はいッ…!」

ジャックは電光石火の速さで自分の席であろう、空いた2つの席の内、スバルの隣の席に着く。

ク「…貴方の席はそこじゃないわよ」

ジ「なぬッ!?!」

今度は光速で、ルナの隣のもう一つの席へ着く。
ジャックが席に着いたので、クインティアは出席簿を開き、名前を
読み上げようとする。

すると、まだ呼ばれてもいないのに手を上げるルナの姿が。

ク「何?」

同じ、殺気を纏える者同士、ルナは物怖じせずに堂々と疑問を問う。

ル「昨日の先生はどうされたんですの?」

ク「ああ：彼は私の為に担任を降りてもらったわ。今は副担任」

「え…?」

返ってきた答えに、一層疑問が深まる。

特に、私の為にと言う台詞に並々ならぬ深い闇を感じずにはいられないルナ達。

脅迫か? 権力か? 賄賂か? 情事か?

無表情なクインティアが醸し出すミステリアスな雰囲気もあって、
様々な憶測が飛び交う。

大きな謎を残し、今日の終業のチャイムとなる。

展望台――

ここは、スバルのお気に入りのスポット。

星や宇宙、天体観測などが趣味のため、人気が少ないここはいつも
スバルの貸し切りである。

故に、誰が会話を聞くでもなく、スバルはハンターV Gのテレビ電
話で、アイドルとの会話を大いに楽しんでいた。

ミ「へへ、ジャック君もコダマ中学校に通うんだあ」

ス「ビツクリしちゃったよ。朝来たら、ゴン太とキザマロもうるさ
いのなのでき…」

スバルは朝の出来事を、今日も登校しなかったミソラと共有してい
た。

だがもちろん、ジャックとの珍事だけは胸の中にしまっておく。

変な誤解をされない為に。

だが一部始終を見ていたウイザードのウォーロックという、首に爆弾を下げた犬が一匹。

ウ『スバルの方がうるさかったろ？ジャックとイチヤイチャー』「ああああああ!!」——』

ミ「ん？イチヤイチャー？」

ス「なんでもないツ!!なんでもないよツ!!」

ウ『ぐぎや…ツ!!』

首を傾げるミソラを他所に、スバルは凄惨な形相でウォーロックの首根っこを掴み、自分へ手繰り寄せる。

ス「ウォーロックは黙ってて…!いい!!」

ウ『ば…ばい…!!』

スバルは首根っこから手を離し、ウォーロックは距離を取って噎せながら息継ぎに全神経を集中する。

スバルはウォーロックの失言から意識を逸らすために、彼にはお構い無しで話題を戻す。

宇宙人のウォーロックに呼吸は必要もないし…

ス「し、しかもさ、ジャックと一緒にクインティア先生まで担任として現れちゃってさ…!」

ミ「え!?!そうなんだ!」

ス「それで委員長が、昨日の担任はどうしたんだ? って聞いたたら、私の為に降りてもらっただって…!」

スバルの話しを聞いて、ここでも例に漏れず、クインティアの件に対して憶測をするミソラ。

ミ「それはきつと、WAXAの権力っぽいね…」

ス「…だね…」

クインティアについてよく知る2人の憶測は、確信の域にあり、そしてまた核心をついていた。

クインティアとジャックは、スバルが小学6年性の頃、Mr. キング率いる犯罪組織ディーラの配下で、スバルを探る為、そのクラスに転校してきた事があった。

ジャックは生徒として、クインティアは教育実習生として。

そして今はWAXA日本支部に所属している。

ミ「どうして学校に来たんだろお…？先生になるのが夢だったりしたのかなあ〜？」

常に無表情で感情の起伏が分からないので断言は出来ないが、今日1日担任として、生徒に笑顔を見せる事がなかったクインティアが、先生を夢見ていたとはとても思えない。

ス「んー…何か違う気がする…」

ミ「じゃあまた仕事かなあ〜？」

きつとそうであろう。

どちらかと言えば嫌そうな表情に見えたし、スバルは深く何度も頷くき、そうだろうと主張した。

話題が尽きたところで、新しい話題を探してミソラの顔を見ると、後ろでハープが、ディスプレイの端から端を行ったり来たりしているのに気付く。

ス「なんか…さつきからハープが忙しそうだけど何してるの？」

ミ「ん？引越し準備だよ？」

何故今頃、引越しの準備をしているのだろうか。しかもハープ一人で凄く忙しそうだ。

電波生命体は汗を掻くことはないのだが、気の毒にも汗が流れて見える。

ス「ボクも手伝いに行こうか？」

ディスプレイの背景で、水をやった花が活力を取り戻すかのような表情で、ハープは嬉しそうにこちらを見る。

しかし、

ミ「だめ！汚い部屋だから見せられない!!」

と、ミソラの一言で淡い希望は打ち砕かれる。

ハープは手に持っていたミソラの楽譜を投げつけて抗議する。

ハ「何でよ!?!猫の手も借りたいくらいなのに!!」

投げつけられた紙の束が、ミソラの後頭部を直撃する。

ミソラは纏わり付く楽譜を蹴り払うと、床から抱える程の服を拾い

上げハープに投げ返す。

ミ「だってしようがないじゃん！仕事で忙しかったんだもん!!」
部屋中に飛び交う、セーターやスカートなどの衣類。

中には下着までもが宙を舞っている。

ハ『いつもアナタが散らかしっ放しなのがいけないんでしょうが!!脱げば脱ぎっぱなし、やればやりっ放し!』

ス(パ、パンツが:/:/あれは便宜じゃなくて本当に散らかってたんだ:)

ディスプレイ越しに思いがけず遭遇した修羅場。

スバルそっちのけで繰り広げられる光景から、引越し関係なしにミソラの部屋が如何に散らかっていたが伺えた。

それから3分間、ミソラとハープのやり取りが一段落した所で、スバルに観られている事に気付く。

ミソラは今まで自分が投げた物の数々を思い出し、顔が一瞬にして紅潮する。

ミ「き、今日中には荷物をまとめて明日は私も学校行くから:!:よろしく願います:!:/:/」

ス「そっか、楽しみに待ってるよ!」

真っ赤にした顔で取り繕うミソラに、不覚にも可愛らしく思うスバル。

緩む表情と格闘していると、ミソラが遠慮した面持ちで相談を持ちかける。

ミ「それで、お願いがあるんだけどさあ:」

ス「どうしたの?」

ミ「明日一緒に登校してくれない:?:ちよつと不安なんだあ:1人で行くって:みんなに顔指されるの嫌だし:」

ミソラは国民的アイドルとい名声に決して自惚れている訳ではない。

テレビ局やライブ終わりの出待ちから、ストーカー被害。

変装しないで街中を歩く時はもちろん、変装していても気付かれる事が多々ある。

久しぶりに学校へ登校すれば、1日中みんなに追われて窮屈な生活を送っていた。

スバル自身も、ミソラが突然に変装もせず現れて街中がパニックに陥るなど、色々と巻き込まれた事が何度かある被害者で、事の重大さは身に染みて分かっている。

ミソラの為に、そして自分の為に、二つ返事で快諾する。

ス「うん、いいよ」

ミ「じゃあ明日の朝スバル君家いくね！」

ミソラは笑顔を取り戻し、ハンターV.Gをディスプレイを閉じようとした時、スバルに呼び止められる。

ス「ミソラちゃん……」

ミ「なあに？」

ミソラは寸でのところ手で止め、耳を傾ける。

ス「気が変わったら連絡して……ボクも手伝いに行くよ」

スバルに部屋の散らかり様を知られた以上、拒む理由はなくなったのだ。

ミ「……あ……ありがとう……／＼／＼」

だが実は、更に深い闇が眠っている事をスバルはまだ知らない。

それ故に、ミソラがスバルを呼ぶ事はないだろう。

ハープの願いも虚しく。

ハ『早く来てえ——！スバル君ん——！！』

第6話

大きな大きな窓から、燦々と照りつける太陽が清々しい朝。

雲ひとつない大らかな青空の下、春風に揺蕩う木々の囁き声がリズムを刻む。

一季の訪れを祝い、小鳥の合唱団はこのリズムに詩を乗せて唄う。心を惹き付けられる凛々しくも儂い音色の中、大きく音程を外した、煩わしい歌声が響く。

ウ『ウオオオオオオオオオオオオウツ!! ohoh! Yeah! WOW WOW!!』

この不快感極まりない歌声を披露したのはウォーロックだった。

ジャ○アンが如き野太く疎かな声は、家の中はもちろん屋外にもその雑音が響き渡り、心を持った生物は皆一様、一目散に逃げ出す。

スバルを除いては。

ス「…」

ウ『YO! YO! スバルYO!?! 起きなきや怒るぜ?! バツキヤYAROO!!』

ス「…ズビイーツ!……」

ウ『HEY! YO! 鼻を咬むなら飯を噛め! 起きろYO! Meeeen!』

ス「……………」

ウォーロックの下手くそな怒涛のラップを耳にして、微動だにせず未だ眠り続けるスバル。

どうやらスバルの目覚まし時計と自負して、この恥ずかしい歌唱力を披露しているらしい。

ウォーロックは更なる高みを目指し、より一層声高らかに唄う。

その表情は思いのほか爽やかなのだが、スバルは未だ寝息を立てている。

それでも、努力を続ける事10分——。

スバルの眠りは驚く事に深くなっていた。

奮闘虚しく、こう相手にされないと込み上げるものがあるようで、

額には血管が浮び上がっている。

ウ『こうラアアアアアツ!!いい加減起きやがれエエエ!!』

ミ「んゝ起きないねえゝスバル君…」

ウ『全くよう!ミソラからもなんか言っちゃ——…』

気が立っているからだろうか、スバルとウォーロックしかいないこの部屋で、聞こえる筈のないミソラの声がしたような。

誰も相手にしてくれない環境で、無意識に返してくれる人を創り上げてしまったのだろうか。

だがそれが、よりもよつてミソラだとは、我ながら情けなくなるウォーロック。

ウォーロックは肩を落とすし、人間の真似をして流れない汗を拭く。

ミ「大丈夫?起こすの疲れちゃったかなあ?」

また幻聴が聞こえる。

ウォーロックは声が聞こえた方を見ると、瞳の奥にニコニコと満面の笑みでこちらを覗き見るミソラの顔が映る。

ウ『Why!』

音も無く現れたミソラとハープに度肝を抜かたウォーロックは、ひっくり返ってベッドから落下して後頭部を打ち付ける。。

ミ「大丈夫…?」

ハ『音痴とか?』

ミソラの心配に被せて、蔑んだ言葉を掛けるハープ。

音痴と言われ、ウォーロックは透かさず反論する。

実はウォーロック、結構歌唱力に自信を持っていただけにハープの一言が堪えたようで、動揺を必死に隠そうとする。

ウ『お、音痴だと?!そりゃ…アレだぞ!スバルを起こすために敢えて下手に歌ってたんだぞ…!ありゃあホントの実力じゃねえんだぞ…!!わかったか…!!』

ハ『ふ—ん…?』

ベッドの上にいるハープを下から見上げ、身振り手振りに強がるウォーロックの姿は最早、負け犬の遠吠えにしか聞こえないし、哀れでならない。

相手は世間様に歌唱力を評価されているミソラのウイザードで弦楽器の琴の姿までしていて、下手な筈もない。

そんな彼女に音痴と言われたのだ。

死ぬまで、ズタズタのプライドを引きずって生きるしかない。

ウオーロックは部屋の隅で、膝を抱える。

可哀想なウオーロックに代わって、ミソラはスバル起こしの任を引き継ぐ。

ミ「起きろおゝスバル君ゝ」

当然、眠り続けるスバル。

呼びかけた程度で起きるのなら、ウオーロックの歌で目が覚めている筈だ。

ミ「おゝい？ん―…とりゃ！」

ミソラは実力行使でスバルの上に跨ると、胸をトントン叩き始める。

ハープは真意を理解出来ずに目を丸くする。

ウオーロックの世界一不快な目覚まし音も効果が無かったスバルに、果たして叩くだけの行為に意味があるのだろうか。

ス「んん―…？」

ミ「お？」

腹部に押し掛ける重量に、心臓に圧迫する衝撃などの原因が重なった結果、微かに声が溢れるスバル。

意図した行動かは分からないが、ミソラは期待を募らせてスバルの顔を覗き込み、まじまじと見る。

そして、これがまた計算された動きなのかは分からないが、スバルを起こす決定打となる。

ミ「起きたかなあゝ？」

ス「―…んゝ…あ…？」

何かが鼻を掠め、普段嗅ぐことのない甘い香りが鼻腔を刺激する。同時に、鼓膜を刺激する黄色い声。

身体に感じる重圧に、小刻みに吹き付ける温かな感触、

徐々に取り戻す五感が異常を訴える。

スバルは瞼を持ち上げ、靄を払うように目を擦る。

朝1番に目にしたものは視界一杯に覆われたミソラの顔だった。

ス「な…何やってるの…!?!?!」

ミ「…え?」

ミソラは今の状況を整理する。

スバルを起こすために直情的に行動していたが、寝ていた異性の上に跨り、顔を寄せている所を見るに——夜這いと勘違いされかねない。

スバルの母、あかねに見られる事は避けられたが、スバルには痴女と思われているであろう事は自明だ。

ミ「ご、ごめんなさい…!?!?!」

ミソラは火照る顔を隠すようにスバルの部屋を出て、足早に1階のリビングへ向かう。

スバルは紅潮した顔で呆然と、ミソラが部屋を出るまでその背中を目で追った。

そして、後をつけるハープが部屋を抜けて、追うものなくなった瞳はそのまま扉を見つめ続けた。

頭が重く、思考が働かない。

だが、ウォーロックの呟いた一言でミソラの行動を理解したスバルだった。

が、ウォーロックの気持ちを理解する事はなかった

ウ『何であんなんで起きるんだ…?オレの努力って一体…』

ウォーロックが2年に渡って築き上げた、唯一スバルにでかい顔が出来る天職が、たったの1日で取って代わられた事に啞然として、ゾンビの様に部屋を後にする。

支度を終えたスバルは1階リビングの戸を開ける。

ウ『ウォオオオオっ!!オレはもうダメだ…!』

あ「あらあら、大丈夫ロック君?」

ウ『おふくろく〜ッ!!』

あかねの胸に飛び込んで、泣き喚くウォーロックの姿があった。ガサツで、戦闘狂で、しかも『誰の指図も受けねえ』と、一匹狼のウォーロックが、あろう事かあかねの胸囲に手を回し号泣している姿に、若干の引きとギャップに対する微笑が襲う。

ス「ど、どしたの…?」

ウ『オマエのせいじゃアアアッ!!』

崩れ切った顔で、腹一杯の怒りをスバルにブチ撒ける。

スバルは意味も分からず、そして分かつてもせず、朝食をご馳走になっているミソラの隣に腰を下ろして朝食にありつく。

あ「もうスバルったら! ロック君のカツコイイ歌聴いてなかったの!?!」

ウ『おふくろ…!!!』

あかねの台詞に首を傾げるハープを余所に、当のウォーロックはあかねの一言に感銘を受ける。

切り刻まれ、磨り減った自信が滾り、大空を舞うようだ。

ス「歌? あ——…そう言えば、なんか雑音が聴こえてたような…」

そしてスバルの一言で、自信が地面へ一直線に落下し砕け散る。

拾い集めるのが不可能な程粉々に——

ウォーロックはあかねの胸に顔を埋めて、再び泣き叫ぶ。

あかねは赤ん坊をあやす様に頭を撫でてウォーロックを慰める。

あ「大丈夫よロック君! 今度は私がスバルを追い詰めてあげるわ!」

あかねは、ウォーロックの無念を胸に秘め、話題を180度急転換する。

その瞳は燃え盛る炎を灯している。

スバルはこの目を知っている。

そう、とても良く知っているのだ。

あの目は、この状況を面白がっている目。

あ「ねえスバル? アンタ、ミソラとどこまで行ったの?」

ス「ブウツ——!!」

質問が直球過ぎて味噌汁を吹き出すスバル。

普通は本題の前に世間話の一つでも噛ましそうなものだが、あかねは普通ではない。

彼女は決して隙を与えないのだ。

唐突に、そして、確実に、相手が構える隙を与えること無く懐へ踏み込んでくる。

これがあかねの油断ならない所以である。

そして、

ス「はあッ!?!／／」

ミ「み、見てたんですか!?!／／」

曖昧な表現で質問する事で、相手は意味や真意を模索しようとする。

やましい事がある人ほど叩けば埃が出るもので、スバルとミソラの両名は先程のやり取りか頭を過ぎり、あかねの質問の意味を読み違えてボロボロと埃がこぼれ落ちる。

あ「：見てた?」

これを見過ごす人はいないだろう。

あかねなら尚更だ。

だが、あかねは敢えてアプローチを変える。

あ「ねえねえミソラ?スバルとはどんな関係?」

ミソラは口に含んだ物を喉に詰まらせて噎せる。

スバルを追い詰める筈なのに、自分に話題を振って来た事に驚いたのだ。

だがそれも、恋愛関係の話題に目がない女性の特徴を突いて、ミソラを籠絡する算段だ。

そして口を滑らした所で、質問を明確にして答えやすくする。

ミ「ど、どんな!?!それは：そのおく／／」

ミソラはスバルを横目でチラチラ伺う。

ス「な、何!?!」

この僅かなやり取りで、全てを悟ったと言わんばかりに、あかねは項垂れた。

あ「あゝあゝ！スバルがそんなんじや関係が進む事なんてないか…ね？」

あかねの言葉に共感するしたミソラは、キツツキの様に何度も小刻みに頷く。

その俗耳に入り易い態度は、完全にあかねの術中に嵌り、剩えあかねを味方と捉えたようだ。

今なら何でも口にしそうな勢いが出来上がった。

あ「で、見てたって何…!？」

ミ「え…!?!?!」

速やかに大本命へと話題を向けるあかね。

ミソラは目を回し、頭を抱える。

あの出来事を言ってしまう訳にはいかないが、他にどう返したらいいのかわからずに混乱を極める。

あ「キスでもした？」

ス・ミ「——ツ■◆●※；○∏!?!?!」

初々しい2人はキスの一言で茹で蛸のようだ。

あかねの回答は外れているし、2人共まだファーストキスを捧げた事はないのだが、その言葉が放つ衝撃は、呼吸を困難にさせる程の力があつた。

胸に手を当て、全神経を集中させて呼吸を整える2人。

2人の過剰な反応に、あかねと、話を黙って聞いていたハープは大笑いする。

すると、ウオーロックが口を開く。

ウ『そうか！ミソラの奴、キスで起こしやがったのか…!』

『——へ?』

王子様のキスで目覚める——ではないが、何処かで耳にしたのか、童話でも読んだのか、それは定かではないが、勘違いしたウオーロックの軽率な発言で時間が止まったように場が静まりかえる。

爆笑していたあかねは口を開いたまま静止し、一部始終を見ていたハープは、頭上に？マークが次々浮び上がって止め処無い。

眠っていたスバルは、唇の安否が分からず仕舞いで、勘違いの原因

を作ってしまったミソラは、恥ずかしさで卒倒している。

今のミソラに目覚めのキスでもしたなら、童話と違ってそのまま昇天してしまいそうだ。

朝から、あかねの恐ろしさと、ウォーロックの中途半端な知識からくる愚直さを目の当たりにしたミソラだった——

第7話

ミ「うう〜…！なんか緊張するよお〜…！」

あかねの策謀とウォーロックの愚直さの所為で、居心地の悪さを感じたスバルとミソラの2人は、足早に家を出て数分、コダマ中学校の校門前まで来ていた。

ス「ところで…その格好はどうかならなかったの…？」

ミ「なんで？」

ミソラの緊張など何処吹く風。

スバルの関心は、緊張よりもまず、ミソラの格好だった。

制服のセーラー服に、レンズの大きなサングラスと深く被った野球帽…

それはスケバンの様な出で立ちで、ミソラに言わせれば立派な変装らしいが、家からここまでどれだけの通行人が怪奇な目を向けた事か。

人目に慣れてるミソラはまるで気にしていなかったようだが、スバルはその視線の違和感に心が休まらなかった。

彼女の存在を知られれば騒ぎにもなるし、変装に関しては同意だが、他に方法はなかったものか。

ミ「みんなダンボールに荷物詰めちゃったからさあ、こんなのしか無かったんだけど…似合わないかなあ？」

ス「うん。浮きまくりです」

ミ「えええ〜！そんな事ないでしょお〜!？」

ふくれっ面して抗議にでるミソラ。

だが同時に、周りの視線にも気付いたようで、これ以上食い下がる事はなかったが、納得いかない様子だ。

ミ「わたし可愛くないかなあ…」

ス「いや、番を張りたければいいんじゃないかな…」

ミ「どういう意味…？」

ある意味では女番長と呼べなくもないが、少なからず登校初日の女

の子がする格好ではない。

オシヤレには疎いスバルだが、ミソラと変装について鬪論していると、玄関口から聞き捨てならなき言葉が耳を付く。

「おい、聞いたか？響ミソラがこの学校に来るんだってよ……！」

「B組にいるんでしょ……!?!」

「これはお近付きになるチャンスだぞ……」

「オレ……本人を前にしたら……思わず告っちゃいそうだツ……!!」

「ミソラちゃんの制服姿を拝めるなんて……最高だあツ!!」

発信源が何処からなのか不明だが、ミソラの在学が洩れてしまったようだ。

もう既に、学校中がミソラの話題で持ちきりだ。

ミ「おかしいなあ……校長先生には口止めしといた筈なんだけど……」

つまり、この状況を作った犯人は校長先生以外の誰かとなるが訳だが、そうなるミソラから直接話を聞いた、スバル、ルナ、ゴン太、キザマロの4人となる――

ス「ボクは誰にも話してないけど……」

ミ「うん。スバル君の事は勘定に入れてないから大丈夫」

となると、スバルを除いた3人に絞られる。

ミソラは既に、おおよそ検討はついているが、友達を疑う様で気が引けるし、遅かれ早かれこのような事態は起きていたのだ。

ここは変装もしているし、気にせずに教室まで行きたいところ。

ミ「ま、いつか！行こ？」

ス「え……?うん……」

(ちよつと軽くない……?)

気を取り直して2人は廊下を渡る。

だが、数歩進んだところで、一つの何気ない会話を聞き及ぶ。

「この情報はだれ発信だ？」

「あ？確か1年の……牛……牛なんたら……太郎？」

ス・ミ「……………」

そう、これはルナとゴン太にキザマロ、そしてジャックの何でもない雑談から始まった。

キ「最近、ミソラちゃんのライブ情報が入ってきませんね……」

ゴ「寂しいよなあ……」

近頃、ドラマやバラエティ等で音楽活動が疎かになりつつあるミソラ。

生粋の追っかけで、ミソラのファンクラブにも当然加入している程に熱を持ったゴン太とキザマロの2人は、人生における大きな楽しみの一つであるライブが行われない現実には、落胆の表情を隠せずにいる。

ハンターV Gを操作し、ミソラの過去の記事や写真等を、過去を偲ぶ老人の様に見返す。

ゴ「おーデビュー当時の写真だぜ！カワイイなあ〜ミソラちゃん……！」

ジ「響ミソラ……響ミソラ？誰だっけ？聞き覚えあんな……」

キ「——ッ!？」

心臓を抉る驚きに目を見開いてジャックを睨むキザマロ。

キ「ミ……ミソラちゃんを……知らない——だと……!？」

かつてジャックは、スバル達と行動を共にした際に、何度か響ミソラと出会った事がある。

そして、キザマロ含めスバル達もそれを知っている。

なのにあるう事か、ミソラを認知していないジャックに血管が浮き出るキザマロ。

ジャックは普段、TVのない生活を送っているので、目にする機会が少ないだけに忘れてしまうのも無理はないのかもしれない。

だが、キザマロにとっては、とても看過出来る事ではない。

ステージや警備員、流行に敏感なだけの群がるいい加減なファン共を挟んだ距離で見た訳ではない。

TV画面越しでもなければ、撮影現場を遠くから覗いて見る距離でもない。

友達関係の距離感で、白い透き通る肌に太陽の様な満面の笑み。心を落ち着く甘い香りに、心地よい優しい声を直に聞いて、どうして響ミソラを忘れられようか。

しかも、水着姿まで押んでおいて。

(そうか。ホモだからか。ホモだからなのか)

キ「ホモには分からないでしょうね。ミソラちゃんの良さは」

キザマロは溶岩の様に熱く滾るミソラへの想いを、貶された気分を駆られる。

彼は刺のある口調でジャックに吐き捨てる。

ホモ疑惑の再来に、慌てて否定するジャック。

ジ「ホ…!?ホ、ホモじゃねえって言ってるんだろッ!このチビ!」

キ「な…何をおお…!?」

キザマロに対しての禁句を軽々と吐いて捨てたジャック。

シヨックで狼狽しながらも、売られた喧嘩を買おうと身を乗り出す。

しかし、

ル「止しなさいアンタ達!」

キ「ッ——!!」

ル「見つともないわね…ミソラちゃんに喧嘩するんじゃないわよ!」

再びルナによって遮られる事となる。

紛争の調停者の様な神々しい仁王立ちに、言葉を呑む彼等。

静まった空気に耐え切れなくなったゴン太は、場を取り繕うとして明るい話題を振る。

ゴ「そういやあよ、ミソラちゃんは何日学校に来るんだ?早く会いてえよなく!これから毎日会えるなんて夢のようだぜ!」

ル「ゴ、ゴン太!!」

ルナは「しまったと」と頭を抱える。

ミソラの在学が露見すれば、学校中が騒ぎ出すのは考えるまでもない。

だが、そこまで考えが及ばないゴン太の頭脳に対して、警戒を怠つ

てしまった事にルナは責任を感じる。

彼の台詞で静まり返る教室はまるで、ミソラの彼女等に対する失った信用を表しているようだった。

だが、学校中を混乱の渦に陥れたとして呆然とするルナの心とは裏腹に、クラス中が笑いだしゴン太を馬鹿にしだす。

「ないない！なんで響ミソラがこの学校通うんだよ!？」

「アイツ頭湧いてんだろ?」

クラス中がゴン太を嘲笑う。

真面に考えてトップアイドルが、窓ガラスに何も無い、ただただ普通の公立校に来る理由はない。

馬鹿にされるゴン太を無視してホッと安堵するルナ。

だがミソラから直接聞いたゴン太とって、真面な考えどうこう以前に、それだけが事実。

彼は自分の名誉の為に反論する。

ゴ「オレが嘘言ってるって言うのかよ！」

ゴン太とクラス中が火花を散らす中、ポツンと呟くジャック。

ジ「クラス名簿見りや分かんじゃねえか？」

彼の一言でハッと冷静を取り戻した彼等は、一時休戦してゴン太の発言の正否を確認すべく、ジャックとゴン太、そして一部の男子はクラス名簿を持つクインティアの下へ向かう。

職員室の戸を開けると、ディスクに向かい、ピアノを弾く様な軽快なりズムでキーボードを叩き、書類を作成していくクインティアの姿があった。

険しい表情で仕事を進めるクインティアに、若干怖気づいている男子一同。

誰が声を掛けるか、みんなが小声で押し付けあっていると、クインティアの弟ジャックが一步を踏み出す。

ジ「なあ姉ちゃん」

忙しなく動く手を止め、自分を呼ぶ声の方へ振り向くクインティア。

ひたすら無言で、とても不機嫌な表情をしているクインティアに、

ジャックの背に隠れて物怖じするゴン太達。

構わず用件を伝えるジャックの肝の据わりように、一同は頼もしさを覚える。

ジ「クラス名簿見せてくれよ？」

ク「何故：？」

ジ「な、何故？それは…」

理由はもちろん、響ミソラの名前があるか確認する為だ。

それを素直に告げようとする。

が、瞬間に過ぎる。

たかだか1人の名前を確認するただそれだけの為に、仕事を遮ってただで済むとは思えない。

クインティアが下す罰の恐ろしさは、その身がよく知っている。

ジャックは脳を全力で動かし、慌てて相応の理由を模索するが、クインティアの逸れない視線に急かされる。

ジ「あ…み、みんなの名前を早く覚えたくてよ！」

ク「意外ね：他人に興味があるの：？」

ジ「あ…ツ?!」

咄嗟に吐いた嘘に無理を感じるジャック。

それを証拠に、クインティアも不信感を持った様に突っ込んできている。

今迄、他人に興味を持った事もない自分が、名前を覚えたい等よく言えたものだ。

だがここで、付いた嘘を嘘で上塗りしては、更に疑われるの自明だ。

ジャックは罰を覚悟して、嘘を貫く。

ジ「ま、まあな…」

ク「…：…そう」

クインティアは軽く微笑むとクラス名簿を手渡す。

ジ「——あり：？」

(貰えた…なんでだ？マジでか…!?)

巣立つ雛鳥の様に、弟が自分の下から離れ成長していく姿に、少しの寂しさと、何よりの喜びに満ちる。

ただ、それが勘違いであるのが残念な所だが。

ジャックはクラス名簿を受け取ると、ゴン太達が一斉にそれを剥ぎ取って、血眼になってミソラの名前を探す。

そして、期待通りの結果を目にした男達は、職員室で甲高い声をあげる。

「マジかよオオオオオオツ!!?」

——して、現在に至る。

ミ「やっぱり…ゴン太君かあ…フ…フツ…ンフフツ——!!」

ス「ミ、ミソラさん…?」

突然不気味に笑いだすミソラ。

チャームポイントの太陽の様な笑顔から一変して、妖しく狂った様に笑う彼女に、スケバンの様な格好も相俟って恐れを抱くスバルは後ずさり距離を取る。

ミ「いずれはバレてたさ…でも…もつと…!計画的に行きたかったに…!ゴン太君のバカアアアアア!!」

第8話

——教室

ミソラとスバルは気配を殺し、人目に付かないように行動して目的地の教室まで辿り着く。

教室の戸を開けると、ガラガラとなるドアの音に反応して全員が一斉に注目する。

その過剰な反応の速さから、響ミソラに対する期待が何わずとも感じ取れる。

(ドキドキ…)

34人、クラス全員の視線がスケバン姿のミソラに集まり、緊張で胸が高鳴る彼女はその場で固まって動けなくなってしまう。

それは、1人にでも気付かれてしまえば、感染症にも負けないスピードで広がるラブコールの嵐に対する恐怖が刻まれているが故だ。

だが、ミソラの心配とは裏腹に、1人2人と彼女に背を向ける。

これだけの人数が居れば1人や2人、ミソラの変装を見破る者が現れてもおかしくはないが、皆、興が冷めた様に大した反応も見せず、各々が再び響ミソラの話に花を咲かせる。

ミ「……あれ？助かつた……？のかな??」

ス「変装が功を奏したのかな……？怖い格好してるしね」

皆の興味が削がれた理由は変装も1つではあるが、それ以上に、隣にスバルが男が立っていた事が大きな要因だ。

何でもない平凡な男の子が、まさか響ミソラと面識があるだなんて思いもしないからだ。

ス「とりあえず席に着きましょう……頭^{かしら}」

ミ「頭ッ!?!」

突然、恭しく席まで先導を始めるスバル。

ミ「どうしちゃったの……？頭って何？」

頭という発言も含め、徹底的に響ミソラという存在を臭わせない様に、彼女の変装に併せて擬態を始めるスバル。

彼女は訳が分からずに立ち尽くしていると、ルナとその愉快的な仲間

達が2人を囲うようにして現れる。

キ「おはようございます！コチラの方は誰ですか？」

ゴ「おっかなそうな奴だな……」

ミソラの存在を忘れているジャックは論外として、彼女の崇拝者であるキザマロとゴン太は、まるで変装を見破れないでいるようだ。

ゴン太に関しては、格好からくる威圧感で軽い身震いを起こしている。

ファンが聞いて呆れる2人にルナが物申す。

ル「ちよつと……誰ってミソラちゃ「ストオオオツプ!!」」

（当たり前前のように変装を見破るルナの口を、途端に手で抑えて遮るミソラ。

ミ「ダメ！今日はダメ!!今日はダメだから……!!」

耳元で何度も何度も念を押すミソラの異常な慌てのように、何かを察したルナは黙って口を噤み、何度も頷き理解を示す。

ミソラは理解を得られるとそつと手を離し、何かを耳打ちした。

ルナは目を見開いて驚いた表情を見せるが、咳払いをし一変、顔を整えて呟く。

ル「………頭よ」

キ・ゴ「頭ッ!?!」

（あ、あの委員長を従えるお人がいようとは……!!）

ミソラはスバルの呼び方に習い、ルナにもそれを強要した。

頭という響きに2人は恐れおののき、舎弟に加わろうと手を握ねて

ミソラに媚びへつらう。

キ「頭様あく……!お席の方はどちらでございまするか!?!この私めがご案内致しますです……!!」

あのルナ以上に恐ろしい存在の出現に、緊張から滑舌が悪くなり、敬語の使い方も可笑しくなっているキザマロ。

その額は脂汗で顔がテカリ、目に入る水滴が染みて瞼をシバシバさせている。

ルナは目の前の光景にただただ思う。

ミソラのファンと豪語していた者が何故、本人を目の前にして気付

かないのだろうか…と。

ミソラもミソラで彼等の慌て様に恍惚として、悪戯な微笑みでキザマロの間に答え、下手な演技で頭に興じる。

ミ「私の席は星河スバルの隣だ！案内したまえ！」

キ「ははあーッ!!」

ス・ル・ジ（したまえ…？）

ジャックは稚拙な即興コントに「何処の上流貴族だよ」と呆れた様にツツコミを入れる。

それは鋭くミソラの胸を突き刺し、抉ったようで、遇の音も出ずにプライドはひび割れ、そして崩れ落ちた。

（じよ…上流貴族…!?スケバンの…真似…だったのに…!!）

女優で培ったキャリアを否定されたと思い込み、雷で打たれたように硬直して白目を向いているミソラに、先程のやり取りである疑問が湧いたスバルは彼女にそつと耳打ちをする。

ミ「…上流…貴族…じよ、う流…貴族…キゾク…」

ス「あのさ…さっきの席の話んだけど…」

ミ「——はへ…？ああく…スバル君の隣って話し…？」

ス「そうそう…！何でボクの隣って分かるの？と言うかボクの隣なの？」

スバルの疑問は最もで、今日初登校のミソラが何故自分の席の詳細を知っているのか。

しかも、席の配列などでの把握ではなく、星河スバルの隣という理解の仕方がまた奇妙な話だ。

この問題にある程度の予想は付いている彼ではあるが、この推理の真相を本人の口から答えてもらう必要があるスバルは、ジツとミソラに視線を据える。

スバルの指摘で自分の失言に気付いたミソラは、我に返ると皆の納得のいく言い訳を求めて脳内を彷徨う。

何故言い訳を考えるのか、理由はただ一つ。

ミ「え〜つとねえ…」

（どうしよう…なんて言おうかなあ…）

ス「……………」

ミ「……………」

(見てる見てる…見てるよお…ジツ見てますよお…)

ス「……………」

ミ「……………」

(つてちよつと見すぎだからく!!そんなに見つめられたら困っちゃうよお……………)

スバルの熱い視線に、言い訳を考える所か1人勝手にドギマギして顔を紅潮させる。

そして、緩んだ表情を整えて、どう告げるべきか間を置いて十数秒

…

ミ「…。ω<。てへ♪♪」

戯けて見せた。

その、カメラの前のモデルが如く、自分もつ最大限の技術で可愛く見せて誤魔化そうとするミソラの行動で、スバルは「やはり」と深く頷く。

ス「賄賂か…」

ミ「うん賄賂!」

ス「いや、もうちよつと隠す努力しようよ!」

もう誤魔化す事も諦めた彼女の堂々とした開き直り方に、ツツコミまざるを得ないスバル。

ハンターVGから一部始終を見ていたハープは彼にひどく同情を示し泣きじやくつていた。

ジ「陰謀に塗れてんなーこの学校…気の毒な校長だ」

ジャックは利己的なミソラやWAXAの権力に振り回される校長先生の身を考えると、いたたまれない気持ちになるのは何故だろう。

この学校ではジャックとクインティアのみぞ知る事だが、スバル達一同が揃いも揃って同じクラスなのはWAXAの要請である。

電波犯罪が起きたとき、クインティアを筆頭に電波変換を用いる事の出来るスバル達に協力を仰げるようにする為だ。

実は、ミソラがこの学校へ入学したのも、WAXAからの提案が

切っ掛けである。

ただ、当人はWAXAの意に介さず、ただ友達との学園生活への憧れを刺激されて来たに過ぎない。

だがしかし、そんな憧れに憧れた学園生活初日で、まさか頭と呼ばれてスケバンを演じる事になるうとは誰が想像しただろうか。

ミソラの正体に気付いているスバルとルナは心配で気が気でない様子だが、一変してミソラは、頭が妙に気に入ったようでキザマロを顎で指示して席まで案内させて、完全に鼻を伸ばしている。

案内された席に座ると、チャイムが学校中に響き渡り、スバルを含め皆が後を追うように着席していく。

そしてクインティアがカツカツとヒールを鳴らしながら教室に入っ来て、出席を取っていく。

ス「ミソラちゃん：あんまり調子乗ると、後で名乗り出ずらくなっちゃうよ？」

ミ「大丈夫大丈夫！今日1日だけだからさあ〜！それに、ゴン太君には罰を受けてもらわないとねえ〜：フフツ！」

顔に影が差し策謀を巡らす様はまさに、頭と呼ぶにふさわしい形相であった。

ス（悪い顔してるな……）

今迄見た事もないミソラの表情にスバルは遠い目になっていると、クインティアの点呼で挙手を求められる。

ク「星河スバル」

ス「はい」

クインティアは出席簿にチェックを入れると、次の名前を呼ぶ。

その名前は意図せずして教室を混乱に陥れる。

ク「響ミソラ」

「：ツ!?」

驚きを隠せずに各々が響ミソラを探して教室中を物色する。

そしてミソラも一驚して机にうつ伏せる。

その時、机にだけ晒した顔は、極めてアイドルとは思えぬ形相で、決して人目に触れてはならぬものであった。

暫く、彼女の点呼に返答する者も現れず、本人はスケバンに変装しているため、当然該当する人物が見つかる筈もなく、皆がクインティアに不信感を向ける。

クインティアは溜息をつき、間を置いてもう一度点呼を取る。

ク「：響ミソラ」

しかし、やはり返答は無く教室が静まり返る。

机にしがみ付く様にうつ伏せていたミソラは、奇妙に思い恐る恐る教卓を覗き見る。

すると、クインティアの視線を確りと独り占めにしていた。

その力強く、確信に満ちた彼女の瞳に彼女は悟る。

ミ（あ、バレてる…）

喪失感に襲われているミソラに追い討ちを掛けるクインティア。

ク「響ミソラ！」

彼女の視線に誘われ、クラス中が自然とスケバン姿のミソラを視界に捉える。

彼女はその視線に心が揺れた。

ここで名乗り出るべきか否か、この状況に思案する。

ミ（ここで返事を返せば、私が響ミソラと認めちゃう事になる…理想の学園生活を送るには、この知名度が邪魔になるのは分かっている…小学校でもそうだったし…どうしようかなあ…）

だからこそ、平穩に暮らせるように考えた彼女渾身の壮大な計画を、ゴン太の思慮の浅さがせいで足並み乱されて只で転んでなるものか。

ミソラは並々ならぬ決意の炎を瞳に灯す。

ミ（今日をなんとかやり過ごせば、また明日改めて計画を進められる…今日だけはバレる訳にはいかない！

スバル君に私の腹黒さを晒すのとは訳が違うんだ…）

ミ「私、響ミソラじゃないんだけど…？」

ミソラは低い声でスケバンのもつ威圧感を演出して否定する。

そしてアヒル口で口笛を吹いて、クインティアに余裕を見せてみる。

だが、それが逆に、余裕なさを露呈する結果になりジャックに突っ込まれる。

ミ「フ…フヒュ…く…ヒュツ…！」

ジ「吹けてねえし…」

実際は余裕など皆無であって、緊張で頬は引き攣り、原因不明の震えに見舞われていた。

ク「アナタが響ミソラじゃないのなら誰なの？」

ミ「え…う…それはあく…か、頭です…あ！じ、じゃなくて頭だツ…!!文句あるか…!?ああ…!?!?…あ???’」

ク「アナタ大丈夫？」

ハ『主に頭！主に頭ね！頭だけに!!』

ミ「上手くないわよ!!」

咄嗟に返した答えは頭という不名誉な仇名で、しかも敬語を使ってしまった事を大慌てで訂正するが、その全面懦弱さに塗れた上擦った声の迫力のなさに、憐れにも同情と（主にハープからの）罵声が反響する。

精神的ダメージが集り疲労困憊で、膝が笑っている彼女。

だが心はまだ折れておらず、（相手に悟らせてはいけない…!これは心理戦なんだ!!）と決意を新たに、ミソラは皆に満面の笑顔を振りまく。

ただ無言で、ひたすら無言で、固まった笑顔と貫く沈黙。

自分がスケバン姿なのも忘れ、魅せる満面の笑顔が残念な事に、相手に全てを伝える結果に繋がった。

と言うか、スケバン姿で満面の笑みが何故、通用すると思ったのだろうか。

ミ「……………」

口を開かず、笑みも崩さず、クインティアに微笑み続けるミソラと、頭上に？を幾つも浮かべて彼女を見つめるクインティア。

一向に変化しない無言の攻防に、ミソラの隣で脂汗を流すスバル。

ス（これ…何やってるの？話が全然進まないんだけど…）

教室がクインティア含め、スバルと同じ感想に辿り着く。

そこで、この茶番を一刻も早く終わらせるべく、クインティアは強烈な一撃を言い放つ。

ク「アナタが響ミソラじゃないなら出て行きなさい。そこは響ミソラの席よ？」

ミ「うッ…！」

アビリティ、アンダーシャツでHPを1だけ残して耐えるミソラ。だがクインティアはここで、最上の反則的な止めの一撃を浴びせる。

ク「それと、室内での帽子とサングラスは校則違反よ？取りなさい」
ミ「グハア…ッ!!」
ミソラは校則という絶対的力を前に、膝から崩れ落ちる。

そして、ゆっくりと帽子に手を伸ばし、クシヤクシヤに握り込むが、覚悟決まらず、それを取ることに躊躇する。

横目でスバルが冷めた視線を送っている事には気付いてはいない。数秒の葛藤の末、悔しさで歯軋りを立てながらも、負けを認めて素直に帽子とサングラスを取った。

同時に、歓声が教室から溢れ出す。

それはクインティアの勝利を喜んでか、ミソラの存在に歓喜してかは分らないが。

思い浮かべたものとは裏腹に、騒然として始まってしまった学園生活だが、友達に囲まれて期待が膨らむミソラは、この必然もまた、甘んじて受け入れるのだった。

第9話

キーンコーン、カーンコーン…

ホームルームを終えて放課後、各々が嬉々として帰る支度を急ぐ中、笑い声に混じり窓の外から騒然と尋常ならざる奇声が耳につく。

ス「なんか、騒がしい…な」

ミ「イヤな予感が…」

ミソラは苦虫を噛み潰したような顔をして恐る恐る窓の外を除く。

「ここに響ミソラさんが登校していると言うのは本当ですか!？」

「何故こんな田舎に!?! どういった経緯があったのでしょうか!?!」

早朝にバレたのが災いして、学校の誰かが情報を漏らしたようで18人程のマスコミがコダマ中学校に押し掛けて来ており、侵入を阻む教師達と校門の前で押し問答を繰り返していた。

そして、響ミソラ見たさにその周りを屯う生徒達が校庭を埋め尽くしていた。

ミ「やつぱり…」

案の定、想定した展開だったのかミソラの顔からサツと表情が失われる。

ス「うわあくどうやって帰ろうか…あの変装通じるかな?…:…:いや、ムリだな」

あの校庭に何の策略も無しに突っ込めばどうなるか…容易に脳裏に浮かんでしまう地獄絵図を回避する為、額に汗を滲ませながら手段を模索するスバル。

火照った体に汗が流れる。

その汗を拭おうとした時、潮が引くようにスーッと引っ込んでいく。

そしてどういった訳か、冷たい風に吹き付けられた様に身体が冷えていく感覚に襲われ、震えていく。

ハツと何かに気付いたスバルは、迷う事なく、その原因であろうモノに振り向く。

そこには口角を吊り上げたミソラがいて、その周囲をフツフツと沸き起こる恐怖が侵していた。

そう、スバルは気付いたのだ。

この身震いはミソラの殺気によるものだと。

ルナの放つ殺気で植え付けられた恐怖が、理解するよりも早くに身体が察知して震えていたのだと。

この殺気にいち早く気付いたのはスバルだけではなく、同様に毎日毎日ルナを怒らせては殺気を向けられていたキザマロもまただった。

キ「ゴン太君」

ゴ「お？なんだ？」

キ「…逃げた方がいいですよ？」

キザマロの忠告に疑問を示すゴン太だが、行動に移すよりも早く、ミソラにその目で捉えられる。

そして、ゆらゆらと千鳥足で確実に距離を詰めて迫ってくるミソラと、危機感に駆られて友を見捨てて逃げ出すキザマロ。

迫る危機を前に、尚もゴン太は状況を呑み込めないでいる。

スバルやキザマロ以上にルナの殺気に浴びてきた筈のゴン太が見せる済まし顔に、ルナは呆れ顔。

ミ「フツ…フツ…！ゴン太君…」

ゴ「お!?!どうしたんだ!?!」

臭い息を吐く怪物のように、ドス黒く低い声のミソラとは対照的に、憧れのアイドルに声を掛けられた事に、嬉しさの余り声の上擦るゴン太。

ミ「私…知ってるんだからね？フツ…」

ゴ「ん？何をだ？」

ミ「フフフフフツ…どうしてくれるの？私の壮大な計画が…パアじゃない…」

ゴ「計ガ——グヴウツ!?!」

胃酸が逆流して口に苦味が広がる。

ゴン太の言葉も待たず、ミソラは腹部に重い一撃を御見舞した。

そしてこれを機に、後に語り継がれる奇声と罵声が入り混じる暗黒

の30分間が始まりを告げた――

――30分後。

ミ「ハア…ハア…！」

ゴ（…ナンデ…コンナコトニ…）

肩を揺らすミソラの足下に倒伏すゴン太。

その頬には、ミソラの握りしめた拳から流れる汗が滴り落ちる。

その汗に塗れた手は彼の血を連想させ、その滴る水滴はゴン太の涙を思わせる。

暗黒の30分間、必死になって止めに入ったスバル達は、この光景を前に悔しさを滲ませる。

キ「この悲劇を事前に止めることは出来なかったのか…!?クソ！ボクにもっと力があれば…!!」

ス「ちよつとカツコ良く言ってるけど逃げてたよね？逃げてたのね…!?」

薄情にも、30分間外野からガヤガヤと口を挟むだけで、逃げ回っていたキザマロ。

本当に、口だけでなく力もつけてもらいたいと切実にスバルは願う。

ル「やれやれ…今回はどちらも加害者であり被害者なだけに喧嘩両成敗と言ったところね」

ス「いや、清々しい程に一方的なんですけど!？」

この惨劇はゴン太の浅慮が招いたとも言えるが、ミソラが口止めしていないかった為に起きた事とも言える。

しかし経過から結末まで、両成敗と言うにはあまりにも一方的だった。

今もまだ、暴れ足りずに咆哮を上げている。

ミ「どうやって帰ればいいのよおおおおお――ツ!!」

その咆哮は外にまで響渡り、彼女目当てで校庭に群がるマスコミや生徒達が、そのお目当ての声に耳を傾け静まり返る。

その沈黙の中で唯一、彼女に一切の興味がないと言っても過言ではないジャックが、容赦なくツツコミを入れる。

ジ「いや、電波変換でいいだろ」

ミ「あ…」

失念していたミソラは間抜けた声を出す。

ジ「んな事よりスバル」

ジャックは目の前の大物有名人を脇に置き、スバルへ話題を振る。その行為がクラスメイトの中でホモ疑惑に拍車をかける。

ジ「時間ある時にWAXAに顔出せよ。新長官様が話したいってよ」

ス「新長官様？」

ジ「おう。新しく赴任して来たイケ好かねえ上司だよ」

ジャックの言い草から、新たに赴任して来た長官、オリオンは、WAXAに来て早々に職員達を敵に回しているらしい。

彼の態度に新長官の人柄を早くも疑い、引け目を感じるスバルだが、この後、特に用がある訳でもない彼は、面倒事を優先して片付ける事に。

ス「ふーん…じゃあこのまま寄るよ。放課後に用事もないし」

ジ「そうか、話が早くて助かるぜ！じゃあ一緒に帰るか？オレWAXAに住んでっからよ」

ス「うん」

スバルはジャックに同意すると、鞆を背負い込む。

すると、脇に置かれていたミソラが、まるで今迄何事も無かったかの様にスバルの顔を元氣よく覗く。

ミ「私も行く！面白そうな予感がするからさ！」

ミソラも鞆を背負い、軽快に遊び感覚で出口に向かって歩き出す。その軽すぎる態度が癪に障ったジャックはその背中に向かって怒りを吐き出す。

ジ「面白い事なんかある訳ねえだろ!!」

——屋上

ミソラにボコボコにされたゴン太を、ルナとキザマロに任せ、電波変換をする為に人目に付かない学校の屋上へ移動したスバル、ミソラ、ジャック。

ジ「この辺でいいだろ」

電波変換は、世界規模でその名前すら知られていない特別な手段で、その秘技は国家機密に相当する。

故に、電波変換を使う場合は細心の注意が必要になる。

ミ「それじゃそろそろお披露目だね。いい加減電波変換の一つもしないと、このお話の売りがねえ〜…」

ス「…売り？何の話してるの？」

ミ「神のみぞ知る話だよ…フツフツ」

まるで自分が神のように語るミソラ。

神でなければ、キリストの生まれ変わりとも言うのか。

理解の範疇を超える彼女の発言にスバルとジャックは難色を示す。

ジ「ま、バカはほっとけ」

ミ「バカア…!!」

ジャックの台詞がミソラの心に深く刺さるが、特にその刺傷を埋めるでもなく、スバルは気にせずに電波変換を始めた。

ス「トランスコード003！シューティングスターロックマン！」

ミ「え!?! 庇ってこないの…!?!」

——WAXA日本支部

学校からWAXAまで、ウェーブライナーで約2時間の所、電波変換から軽い無駄話も含め20秒もせずに到着したスバル達。

電波変換によって電波化された身体は、肉眼では捉えられない世界中に溢れる電波世界を視覚化し、往来する電波の道《ウェーブロード》を渡る事で、宇宙ですら容易く短時間で移動する事が可能になる。

ジ「着いたな。やっぱ速くて楽だぜ」

スバル達3人は、ジャックを先頭にWAXAのゲートを潜ると、広々とした正面玄関の奥に置かれた受け付けカウンターへ向かう。

「お帰りなさいジャック君」

ジ「おう」

帰宅したジャックに受付嬢が親しそうに挨拶をする。

その後、ジャックの後ろにいるスバルとミソラに向き直り深くお辞儀する。

ジ「お偉いオリオン長官はいるか？星河スバルが来つて伝えてくれよ」

「え!?えッ!!」

ジャックは皮肉を交えて要件を告げると、星河スバルという名前に反応した受付嬢は目を丸くして飛び上がる。

「君ロックマン!?ロックマン来た!?ロックマン来ちゃった!?本物のロックマン!」

ス「えッ…」

(あれ!?なんかバレてる…!必死に隠して来た筈なのになんかバレてる…!!)

ミ「……………」

その受付嬢の食い付き様に、スバルはジリジリ後退る。

スバルはロックマンの正体が自分である事を必死に隠して来た。

しかし、3度目の危機ではWAXAと協力して事に当たった為に、一部の職員には認知されていた。

だが、まさか受付嬢まで知つていようとは。

苦笑いすら浮かべられないスバルと、その横でロックマンを前に顔も指されず形無しのミソラ。

ジ「おい、機密だぞ!?分かつてんのかネエちゃん…!つか何で知つてんだよ!」

「……………」

ジ「……………」

「今(こゝ)案内致します♪」

ジ「知れつと話を逸らすなッ!!」

ジャックの問い詰めで失言に気付いた受付嬢は、沈黙の後に満面の笑みで業務に戻る。

そして受付嬢の取り次ぎで、スバルは1人オリオンのいる部屋へと招かれる事になり、その間ジャックはサテラポリスの仕事に取り掛かり、ミソラは受付嬢に弄ばれる事に。

——とある一室

誘導されるままにオリオンの居る場所へ訪れたスバル。

ス(オリオンって…変わった名前だな…!…どういう人なんだろう…偉そうな人なのかな?)

案内人に促されて部屋に踏み込む。

陽光はブラインドで遮られ、天井の照明は弱々しく薄暗い。

机を囲むようにソファが配置され、その奥には大きな木製のオフィスデスクが置かれた、TVなどでよく見る配色で、その一つ一つが飾り気のないものばかり。

高級嗜好を思い描いていた彼は、なにか言い知れぬ不安を覚えながら部屋を見渡していると、デスクの前に鎮座する厳かな空気を纏った人物と目が合う。

オ「初めまして、星河スバル君。私はサテラポリス長官のオリオンだ」

ス「は、はめまして…」

オ「楽にしている。掛けたまえスバル君」

楽にとの言葉とは裏腹に、外見に加えて低く重い、飾り気のない声質に緊張が走るスバル。

強ばる体で着座する彼の心境を察する訳でもなく、淡々としてスバルの前に腰掛けるオリオン。

オ「何か飲むかね?」

ス「い、いえ…!大丈夫です…」

(水なんか喉に通らないよ…)

オ「ふむ…」

オリオンは何かを一考する。

オ「オレンジジュースは飲めるか？」

ス「え？あ、はい…」

オ「では、彼にオレンジジュースを」

彼はスバルを案内した人物に指示を出し、雑用を与えられた彼女は軽くお辞儀して部屋を後にする。

暫くして、届けられたオレンジジュースを一口含む。

そして、一つ引つ掛かっていた事柄に背を押されて口を開く。

ス「あのく…」

オ「なんだね？」

ス「前WAXA長官はどうされたのでしょうか…？」

オ「前…？ああ、彼の事か」

スバルとの間に誤解が生じている事にオリオンは軽く笑みを浮かべると、彼の言葉を訂正する。

オ「私は、サテラポリス長官だよ？スバル君」

ス「…え？」

言葉の意味を理解出来ずにいるスバルに、オリオンは更に言葉を並べる。

オ「これ迄、二つの組織をWAXA長官1人で指揮して来た…だが今、電波犯罪は高度化し続けている。その為、対応を更に迅速且つ、的確に処理していけるように、私が呼ばれたのだよ」

心配した面持ちで視線を外さないスバルに、ソレを取り除く様にオリオンは1〜10まで順に説明した。

オ「私の赴任に合わせ、サテラポリスとWAXAの指揮系統を分割し、対テロ組織としての拍車を掛けようという事だ。もちろん、WAXAとの協力関係はより密に行うものとしてね」

ス「と言うことは、WAXA長官は健在なんですね!？」

オ「そうとも。なんら心配する必要はない。WAXAとサテラポリスが別々になったと思いなさい」

学校からここに至るまで、ジャックの発言で新長官が新たに据えら

れた事を知り、お世話になったWAXA長官はどうなったのか気掛かりだったスバルは、安堵に顔が綻ぶ。

そして、その表情に感慨深くオリオン頷く。

オ「君は…父親にとても良く似ている…」

ス「父さんをご存じなんですか!？」

オ「勿論。大吾君の武勇伝は耳にしている。」

誉れ高い父親に、胸が熱くなるスバル。

オ「そして君もまた、その正義感を受け継いだようだね？」

しかし、大吾を引き合いに出すオリオンの言葉は、胸の熱を冷まし、鉛の様に重い劣等感となってスバルを襲った。

ス「いえ…ボクは…父さんに憧れてはいますが…父さん程立派ではありません…」

オ「その謙遜する所もそっくりだな…少しは胸を張りなさい。君は、地球を救うという、口にするだけで漠然とした偉業を成し得たのだ。君の父親がソレを達成した事があったかね？」

憧れた人の背を追い、そして超えた事を事実として認識するよう激励の言葉をかける。

だがスバルは、自身の態度を改める事はしなかった。

ス「父さんも地球の皆の為に命を張りました。そして、ボクが頑張れたのも皆の助けがあったからです。ボク一人で出来た事は一つもありませんでした…」

12歳の少年なら自身の成功を鼻に掛けて余りある所、彼はこの手柄を独占しなかった。

キツパリと未練なく手柄を配分する度量を垣間見て、オリオンには疑念が生まれる。

星河スバルは、一体何を誉れとするのかと。

オ「スバル君…私も正義の為に、その偉業を明瞭に成したい…力を貸してはくれまいか? ロックマンの力を…」

ス「ボクなんかで良ければ協力します」

スバルは一考する迄もなく、オリオンの申し出を快く受託する。

彼はソレを受けて、今後の計画を先んじて語る。

オ「先の戦い：デイーラとの抗争で、暁君がゲリラ的に組織したサテラポリス遊撃隊：これを対テロ特殊部隊として正式に発足したいと思う」

サテラポリス遊撃隊は電波変換を用いる人間で構成された部隊。電波変換の機動力を活用して、デイーラの仕掛けた同時多発テロを阻止した功績がある。

オ「まだ幼い君を戦場へ駆り出すの心許無いが：卑劣なテロリスト共は、道徳を遵守させてはくれないのだ：すまないスバル君」

ス「いえ：戦場の非情さは理解しているつもりです」

戦場に深く触れてきたスバルは、その過酷な日々を脳裏に描き、苦笑いしながら理解を示す。

すると、オリオンはここで初めて微笑を見せた。

オ「今日は君と実のある話が出来て良かった。今後の活躍に期待しているよ」

スバルはオリオンに軽く会釈し部屋を後にする。

そして彼を、偉そうなイメージから一心して理解ある大人であると、好感を持ってミソラのもとへ向かった。

同時にオリオンは、スバルに対する懸念をより深くする事に。

—— WAXA 正面玄関

ここを訪れる者は皆、広間に満ちた静粛と威厳に裏付けされた安心感をその身に感じる。

白を基調とする広々とした正面玄関はWAXAの顔と呼ぶべき場所だ。

その場所で、その顔に泥を塗りたくる騒音が響き渡る。

ミ「も、もおく放してえく…!!」

「もうちよつとイイじゃない〜ファンサービスしてよおくん!」

ミ「ここまでサービスしたのはお姉さんが初めてです!」

「あら光栄!もつともつと記録を伸ばしましょっ!?!」

ミ「イヤアアア〜!!」

世に名を馳せ、芸能界を登り詰めた響ミソラが、公然の場で受付嬢のオモチャと成り果てていた。

その異様な光景に、ミソラの顔を指す来訪者達も、視線を逸らして素知らぬ顔をする惨事となっていた。

ス「…何…やってんの…:…?」

処理しきれない程の膨大なボケを前に、突っ込む事も忘れ、ただただ答えを求めるスバル。

ミ「助けてえええ——!!」

膝に泣き付くミソラに、とち狂った殺人鬼の様に嬉々とした瞳を向ける受付嬢が迫り来る珍事に、白旗を上げるスバル。

ガシツ!

受付嬢は獲物を捕え、抵抗を物ともせず力一杯引き寄せる。

そして、余りの怪力に思わず膝を付く獲物。

ス「うわ!……:…あれ?」

(ボクの体に外から強烈な力が…?)

状況を理解するよりも速く、答えはその外から知らされる。

「待ってたわよロツクマン! さあファンサービスしなさい!!」

ス「ボクかいイイイイイツ!!」

今度はスバルが受付嬢の餌食となった。

彼は必死に抗うが叶わず、この身の危険を経験し、誰よりも理解しているミソラに助け船を求める。

ミ「頑張つてねえ〜」

だが非情にも、ミソラは涙一つ浮べる事もなく満面の笑みでひらひらと手を振った。

見捨てられたのだ。

殺人鬼が住む孤島へ漂流したスバルに助け船も出さず、安全な場所で今生の別れを告げる無情なミソラ。

必死に手を伸ばすも、余りに遠く離れたミソラに血の涙を流すスバル。

ス「ナンデダアアアア——:…:…:…:…:…:…」

WAXA中に轟くスバルの心の叫び。

だが、その叫びが人の心を動かす事はなかった。

ジ「何やってんだアイツ等…」

仕事に勤しんでいた親友ジャックの心も。

当然といえば当然だが。

そこへ、後光が差すように強烈な光が差し込む。

「おや？スバル君じゃないか!!」

救いの神のように、颯爽と現れたのは《天地まもる》

スバルの父、大吾の後輩で、優れた電波技術と心根の優しさで満ちたお腹の持ち主。

ロックマンとしてのスバルを知り、落ち込んだりした時には相談に乗ったりと、まさに彼にとっては救いの神だ。

今回も、救いの手を期待したいスバル。

ミ「そんな神々しい登場しちやっついていいの!?!重要なキャラとか思われちゃうよ!?!」

ス「サラッとひどい事言うなあミソラちゃん…」

ま「ハツハツハ!どうしたんだい?救いの神様が相談に乗ろうじやないか!」

小さな事など気にしない。

救いの神と自ら言ってしまう茶目つ気たつぷりの天地に、スバルは地を這ってしがみつく。

ス「助けて!」

スバルは先のミソラみたいに、天地の膝に泣き付く。

ま「もちろん!まあまず立って話をしてご覧?」

加害者を前に被害を訴えれば、抵抗に遭うのは目に見えた必然。だが、スバルら命を晒し、意を決して告げる。

ス「ボク：襲われてるんです!!」

ま「一体誰がロックマンを襲うと言うんだい?」

天地の問いかけを、まさにその加害者が答える。

「ファンです!!」

ま「ああ、成程!」

ス「神イイイイイ！」

提示された答えに納得してしまった天地。

神が納得したのなら、これ以上の法はないだろう。

スバルは神の加護の下、受付嬢へのファンサービスを強要される事になった。

ま「あ、ところで、オリオン長官は居られますか？」

「え？ええ、居りますよ。我が社のオリオンにどういったご用件でしようか？」

今の今迄、我欲のままに一路邁進して来た受付嬢が、唐突に大人の対応を振る舞う緩急の強さに、戸惑うスバルとミソラ。

ミ「どゆこと…？」

ス「全く付いていけないよ…！って言うか、天地さんはどうしてWAXAに!?!冷やかしですか！」

救いの神のように現れた癖に、神足りえなかった天地が、一体他に何の用があるのか。

ま「ああ、今一般公募で科学者を募集していてね。人手を必要としている見たいだったから、それに応募したんだ」

ス「え…：そうなんですか？人手不足には見えませんが…」

常日頃から雑務に、事故や事件の解決。

そして事前のテロ対策など、有事に備えているWAXAなだけあって、皆忙しなく動き回っているが、それでも見て取れる範囲では別段人手不足には見えない。

ま「まあ、公募をするという事は、人を必要としているって事に他ならない！困っているなら日の中水の中！誰かの力になれるならお易い御用ってね！」

天地がドヤ顔でスバルに語り聞かせていると、受付嬢が案内を申し出た。

「天地さん、どうぞこちらへ。オリオンの下へご案内致します」

ま「じゃあな！スバル君、ミソラちゃん！時間があつたらまた、ボクの研究所に遊びおいでよ！」

先導する受付嬢の後に続き、背を向けて別れを告げる天地に、スバ

ルとミソラは手を振って見送る。

ス「またね、天地さん」

ミ「私たちも帰ろおスバル君！」

スバルはミソラに同意して、帰路についた。

ス「なんだかんだと救いの神だったな…」